

す

[通巻第115号] 2024年8月25日発行

ISSN 0916-0671

一般財団法人 住総研

Housing Research
Foundation JUSOKEN

Smile on Housing Forum

2024
夏

ま

い



ろ

特集 廃棄物からつくる

焦点
廃棄物とともに住まう 前田昌弘 [京都大学]

すまいろんシンポジウム
池亀彩 [京都大学]
西村周治 [一級建築士事務所西村組・合同会社廃屋]
一杉伊織 [株式会社TOOL BOX・デッドストック工務店]

論考
梅川由紀 / 二瓶雄太 / 山口純 / 松原永季

連載
私のすまいろん 安藤邦廣
ひろば 西野雄一郎
すまいぼん 松村淳
すまい再発見 富田円

ん



1980
2014



今月の
表紙写真
日本の集落
30年

漁村としては初の重伝建地区指定 伊根の舟屋集落

写真＝畑亮・畑耕・畑拓
[京都府与謝郡伊根町]

京 都府北部、丹後半島の北端に位置する伊根集落は、波の少ない伊根湾沿い約5キロメートルに渡って230軒の舟屋が立ち並ぶ。伊根集落は江戸時代中期頃から存在しており、当時は茅葺き屋根であったという。舟屋は、1階部分は海水が入り込む舟揚げ場、2階は網の干し場や漁具の置き場として使われており、多くの場合は道を挟んだところに主家があり、そこを住まいとしていた。山側は平入りの主屋、海側には妻入りの舟屋の風景が広がる。すぐ山が迫り平地はわずかなため、かつては陸地に道は通っておらず、主屋と舟屋との間は中庭や私的な通路であった。伊根湾内の漁場は豊かで、江戸時代からブリ、マグロ、鯨などが盛んに獲られていた。昭和30年代以降は船の大型化が進み、次第に舟屋の中に舟を停めることが少なくなってきた。海側を閉じる舟屋も現れ、景観が徐々に変わっていったことに危機感を感じた住民たちによって1990年代から保存運動が起り、2005年に、漁村としては初めて重要伝統的建造物群保存地区に選ばれた。選定区に海が含まれたことも初めてのケースだった。(畑亮)



伊根ブリが有名。撮影の日は、マイワシとサワラが水揚げされた。



上：伊根集落は八つの地区があり、写真は、下方に灯台のある亀山集落と、上方に神社や寺がある耳鼻集落がみえる(1980年セснаより撮影)。

右上：慈眼寺よりみる耳鼻集落風景
右下：主屋(左)と舟屋(右)の間。かつては各戸の私的な空間であったエリアが舗装されて道路になっている。

[表紙] 伊根湾口全景(1980年セснаより撮影)伊根湾の中央には保安林の青島が鎮座する。

[右頁上] 小型の木造船での出漁。後ろにみえるのは平田地区の舟屋。

[右頁下] 今では船は大型化し、FRP製の漁船へと変わりつつある。写真の集落は立石地区の舟屋。

すまいろん●目次

特集

廃棄物からつくる

004 焦点

廃棄物とともに住まう

前田昌弘「京都大学」

006

すまいろんシンポジウム——廃棄物からつくる

池亀彩「京都大学」／西村周治「二級建築事務所西村組・合同会社廃屋」

一杉伊織「株式会社TOOLBOX・デッドストック工務店」／司会：前田昌弘

022

論考

ごみ屋敷とは何か——モノが語りだす家

梅川由紀「神戸学院大学」

026

解体祭——建築の「終わり方」を考える時代に

二瓶雄太「東京大学修士課程・一般社団法人ASIBA」

030

エントロピーとアーキテクチャー

山口純「武蔵野美術大学・東京都市大学」

034

市場から棄てられた空き家・空き地の再生

——神戸市長田区駒ヶ林地区の事例から

松原永季「有限会社スタチオ・カタリスト」

038

連載 私のすまいろん

茅葺き民家と草木の循環的利用 安藤邦廣「筑波大学名誉教授」

042

連載 ひろば

ありふれた古い建物を活かす 西野雄一郎「大阪公立大学」

046

住総研だより

048

連載 すまいぼん

廃棄・循環・再利用——消費社会から住宅と生活を取り戻す 松村淳「神戸学院大学」

052

連載 すまい再発見

旧川合健二郎「コルゲートハウス活用計画を通してこれからの住居の在り方を考える」

富田円「株式会社FOODFOREST」

056

編集後記

廃棄物とともに住まう

前田昌弘 〔京都大学大学院人間・環境学研究科准教授〕

互恵的ならざる世界

造園家ジェーン・ハットンによる『Reciprocal Landscapes: Stories of Material Movements』[図1]は、大都市の公共空間の成り立ちを、それを構成する資材の移動や資材の調達現場との関係から描写したユニークなプロジェクトである。タイトルに「Reciprocal」(互恵的)とあるが、そこで描写されているのは、大都市の豊かな風景や公共空間での生活を支えている、資源の一方方向的な転移であり、資材の調達現場との不平等な交換である。近代資本主義は、生産と消費のアンバランスにともなうさまざまな問題を外部へと空間的・時間的に転嫁し続けることで肥大化してきた*1。ハットンのプロジェクトもまた風景の背後にある互恵的ならざる世界をあぶり出し、発展に覆い隠されてきた現代都市の根本的問題を予感させるものである。戦後復興、高度経済成長期を通じて拡大してきた日本の大都市もそのような問題と無縁ではない。それどころか問題はむしろより差し迫った状況となつてわれわれの前に立ち現れている。人口減少、非成長の時代に入り、これまで外部へと転嫁してきたさまざまな矛盾が処理しきれなくなり、都市の内部から風景を侵食しているのだから。その端的な現れの一つが「空き家」であろう。

[図1]
Jane Hutton: Reciprocal Landscapes: Stories of Material Movements (Routledge, 2019)

棄てられる物、場所、そして人

「全国の空き家、約900万戸、7軒に1軒が空き家」。空き家の数は統計上、過去最多を更新し続けており、過去30年で倍増している*2。空き家そのものは社会にとつて一定数必要だが、問題は売却も賃借の予定もなく放置され、ただ朽ちていくしかない管理不全の空き家、いわゆる、「その他空き家」(上の統計では約385万戸)である。全国の新築着工戸数をみると、ピーク時に比べ落ち込んだものの2008年のリーマンショック以降も年間80〜100万戸で推移しており(住宅着工・取引に占める新築の割合は約85%)、これは先進諸国では類をみない高さである。一方で、住宅の除却戸数は年間10万弱と新築に対して極端に少ない*3。この数値が意味するのは日本の住宅市場では未だに新築志向が根強く、中古住宅の取引や除却・再利用が進んでいないこと、さらには管理不全の空き家は今後も確実に増え続けるということである。ちなみに建設廃棄物の産業廃棄物全体に占める割合は約20%。そのリサイクル率は、いわゆる「建設リサイクル法」(2002年の成立もあつて90%以上と高いが、その多くを占めるのは排出量が多いコンクリート塊(排出量全体の50%、リサイクル率99%)、アスファルト・コンクリート塊(同20%、同99%)である*4。また、そもそも除却も再利用もされずに朽ちるに任せている膨大な数の空き家が控えていることも忘れてはならない。筆者の研究室でもここ数年、瀬戸内海のある港町で空き家の住み継ぎのお手伝いをしているが、そこでも増え続ける空き家や不要となつた大量の家財・廃材を目の当たりにしている[図2]。

リノベーション、アップサイクル、リペア。近年よく耳にするこれらの行為は、空き家を含む、棄てられた物や場所に対峙して、「ものを直しつつける社会」(ストックへの適応)を体現する営みであり、本特集のテーマに直結する。一方、新築志向、大量消費・即時消費は「ものを使い捨てる社会」(フローへの適応)、シェア、ノマド、ミニマリストは「ものを持たない社会」(サービスへの適応)の体現と言えるであろうか。「ものを使い捨てる社会」には明らかに問題があるが、「ものを持たない社会」にも問題は潜んでいる。近年、世界中の大都市で「shrinking domesticities」(住まいの縮小)と呼ばれる現象が進んでいるようである^{＊5}。これは端的に言うところ、コンパクトな住宅がものを持たない「ミニマルスタイルの住まい」として商品化され、住宅・土地価格の高騰をさらに加速させ、その結果として中間層を住宅市場から放逐しているという問題である。「ものを使い捨てる」にしても「ものを持たない」にしても、人がものと向き合わないような社会である。そのような社会からは最終的にわれわれ人間も棄てられるとすれば、皮肉でしかないだろう。

廃棄物と向き合う人、場所、風景

それにしても私たちはなぜこれほど物を棄てることに慣れてしまった



【図2】空き家からでた不要な家財や解体材を処分する
(岡山県瀬戸内市牛窓にて 写真=筆者提供)

のだろうか。戦前までの日本の大都市では、高い借家率、人口の流動性、資源の制約を背景として、物の再利用は常識であった。空き家から出た不要な家財や解体材は道具屋・建具屋などを通じて取引され、商品・資源として扱われていた。それが現在は処分料を支払って引き取られ、最終処分場で原材料にまで分解される、ごみ・廃棄物として扱われる。

本特集で取り上げる「廃棄物」とはこのように、「資源」と「ごみ」の間で揺れ動いている不安定な何かである。そこで取り上げたいのは、そもそも「廃棄物」と「ごみ」の違いはなにか、物を直すとはどのような行為かといった、廃棄物の意味についての議論であり、そして棄てられた物や場所に対してさまざまな形でアプローチしている人たちの具体的な実践である。それは、人口減少で家や土地が余る時代になり、私たちがどうしようもなく、棄てられた物や場所とともに生きていかざるを得ないという前提にもとづいている。かつてケヴィン・リンチは『廃棄の文化誌——ゴミと資源のあいだ』(工作舎、2008)において、廃棄された土地は絶望の場所だが、それと同時に自由な戯れやか弱いものを保護する、しなやかな社会に必要な不可欠な要素であるということを説いた。廃棄物に向き合う人々はそこに何を見出し、どのような風景やコミュニティの新たな像を描くだろうか。本特集を通じて接近できれば幸いである。

【注釈】

- *1 齋藤幸平「人新世の「資本論」集英社新書、2020年
- *2 総務省「住宅・土地統計調査」2023年
- *3 国土交通省「住宅着工統計調査」「建築物滅失統計調査」2007～2016年
- *4 国土交通省「建設副産物実態調査」2018年
- *5 Eila Harris et al.『The Growing Trend of Living Small: A Critical Approach to Shrinking Domesticities』Routledge, 2023

前田昌弘(まえだ・まさひろ)

1980年奈良県生まれ。2006年京都大学大学院工学研究科修士課程修了、2012年同博士後期課程修了、博士(工学)。助教・講師、京都府立大学准教授等を経て、2021年より京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。住まい・まちづくりと地域の防災・復興の研究と実践に取り組んでいる。【主な著書】『津波被災と再定住』(京都大学学術出版会、2016)、『住まいから問うシェアの未来』(共著、学芸出版社、2021)、『世界居住文化大図鑑』(監訳・共訳、椋風舎、2020)。

廃棄物からつくる



会場風景／オンライン配信によるシンポジウムを開催。(写真左前から時計回り)巽庭伸編集委員、権藤智之編集委員、西村周治、池亀彩、前田昌弘編集委員(司会)、一杉伊織、大月敏雄編集委員長、中嶋節子編集委員の諸氏。*会場は講演者と運営スタッフ、すまいろん編集委員のみとしました。

【講演1】

リノベーションの人類学の試み —廃棄物(waste)と修復保存(restoration/ conservation)の間

池亀彩「京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科教授」

建物をなおす・残すということ

私は最近、京都の西陣にある織屋建^{おりやたて}といわれる2戸1の長屋を購入し、改修しました。昔の織物の機^{はた}が置いてあったところで、家の半分が工場^{こうば}として吹き抜けになっています。よく言う「と未改修町家ですが、腐っているところもあり、このまま放置していたら倒壊する可能性のある建物でした」^{図1}。

長く空き家になっていましたが、その前はキミコさんというおばあさんがずっと1人で住まわれていて、改修前まで昭和30年代〜40年代の家電や家具など、当時の暮らしがそのまま残されていました。もともとあった古材をなるべく流用しようとしたのですが、実際には躯体以外にはほとんど残せるようなものがなく、一度スケ

2024年3月18日 於・住総研会議室(東京都中央区)

司会 前田昌弘「京都大学大学院人間・環境学研究科准教授」
講演 池亀彩「京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授」

西村周治「二級建築士事務所西村組・合同会社 廃屋代表」
一杉伊織「株式会社T O O L B O X ・デッドストック工務店」

ルトンにしてリノベーションするようなかたちになりました。高額な処分費用を払って、大量の資材をゴミとして捨てることになり、罪悪感とともに、建築業界における環境問題の深刻さを改めて意識することになりました。

設計・施工は三角屋というエリート大工さんたちにリノベーションを依頼したので、改修前からは見違えるほどおしゃれな家になりました^{図2}。この経験によって、やり方によっては、リノベーションによるアップサイクル(格上げ)も可能だということを学びました。また解体することによってこの家を経つ前の痕跡、家よりも長い歴史に出会うこともできました。そして、最も目を開かされたのは、職人たちが見ている世界や感覚でした。物をよく見ていくことによって、普段とは違うものが見えてくるような感覚を体験しました。

こうした経験から、「建物をなおす・残す」ということについては、おおきく三つくらいのかたちがあるのだらうと思っています。

一つ目は「文化財」のように、経済的合理性が低いいため、国家や行政が主導で補助金を出した

り、責任持って維持・補修するようなもの。

二つ目は「ジェントリフィケーション(再開発)」どちらかというと民間資本主導で、経済的な合理性が高く、綺麗にしてビジネスに繋がるような、経済合理性が高いもの。京都だと、民泊とかゲストハウスとして古い町家に、利益を見越した改修が施されています。

三つ目は「好きものの世界」で、個人あるいはコミュニティ主導で経済的合理性を問わないもの。そして、これらの三つを支えているのが「タテモノ・リテラシー」です。それは、建物を見る目とか、部材の納まり、そこへの感覚・関心とか、それを支える知識や技術、あるいはネットワーク



【図1】改修前・購入した京都・西陣の織屋建の長屋
左／外観 右上／2階の様子 右下／織物の機が置いてあった工場



【図2】改修後・スケルトンにしてリノベーションした
左／外観 右上下／室内の様子



ク(コネ)が、「建物をなおす・残す」ということを支えているのだということ。しかし、現在の日本は、カタログで家を選ぶような時代で、われわれの気がつかない間に、「タテモノ・リテラシー」がどんどん失われているのではないかと、という危機感も同時に覚えました。

人類学における「廃棄物 waste」

ここからは、人類学において「廃棄物」をどのように扱ってきたかをAlexander & O'Hare(2023)によるまとめから三つのアプローチをみてみたいと思います。

まず、1960年代から1970年代にかけ

て主流だった「象徴・構造主義的なアプローチ」では、人間はゴミや廃棄物、あるいは汚物とどう付き合っていくか、どう排除するか、という研究がありました。その後あらわれた「経済・物質主義的アプローチ」では、大量にゴミを生み出すような社会における「ゴミ」をどう理論化していくかといった研究や、ゴミをめぐる政治経済、あるいは労働・格差・グローバルな南北格差をテーマにした研究があります。それからインフラストラクチャーとしてのゴミ統治、つまりゴミをどのようにして集めて捨てるかを waste regime と呼んで、一つのガバナンスの形態として読み解く研究があります。

また最近では、「人間以上・生物間アプローチ (More-Than-Human-Interspecies Approach)」とよんで、人間とそれ以外、動物とか細菌とか工業廃棄物との間の関係性を描いていくような、これまでは見えてこなかったエコシステムを描く研究も出てきました。

さらに、誰が廃棄物とみなすのか、主体・文脈によって廃棄物の意味合いが変わるとして、「あなたのゴミは誰かの宝物だ」という言葉があります。それは「廃棄物は資源に変えられる」という政治性に対する隠れた批判でもあります。また、「廃棄物」が作り出す関係性、物質性への関心。「廃棄物」をめぐるさまざまな技術的・政治的知識と、それを知らないでいること (unknowing) などといった議論が展開されています。



池亀彩(いけがめ・あや) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科教授、PhD (Social Anthropology)。1969年生まれ。早稲田大学大学院理工学研究科、ルーヴレン大学(ベルギー)保存修復センター修士課程修了後、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程編入。エディンバラ大学(英国)にて博士号取得。専門は文化、社会人類学、南アジア地域研究。
 【主な著書】『Princely India Re-imagined』(Routledge, 2012)、『インド残酷物語』(集英社新書 2021年)
 【主な共著】『The Gurur in South Asai』(Routledge, 2012)など。

秩序体系を変えてみる

メアリー・ダグラス『汚穢と禁忌』(1966)に代表される「象徴・構造主義的な研究」は、汚物(廃棄物・不浄、社会が望まないもの、人)を排除することを積極的の評価するところがあり、それは差別にも繋がっていくようなものとして、最近の研究では否定される傾向にあります。私自身も、同様の戸惑いを感じますが、今回あえてここに戻ってみようかと思っています。

メアリー・ダグラスはよく「汚物とは場違いなものである(“dirty as matter out of place”)という言葉を使っていますが、要するにこれは「場所」の問題です。たとえば、髪の毛も頭に付いていれば素敵な黒髪が、洗面所の床に落ちていると、ゴミになるということ。場違いになつた瞬間に汚物になり廃棄物になる。つまり、この場所に合っている、場違いじゃないということが重要で、それを秩序づけと言っています。

「秩序づけとは、その秩序にとって不適当な要素を排除することであるが、そのかぎりにおいて、汚れとは事物の体系的秩序づけと分類の副産物なのである」(メアリー・ダグラス著、塚本利明訳『汚

穢と禁忌』ちくま学芸文庫、2009年、34頁。秩序づけからはみ出してしまったものが、少なくともその段階では廃棄物になる。秩序体系を前提として、そこから異物を排除する積極的な行為(「自ら環境を再調整する」和訳34頁)として廃棄物が生まれているのだということです。たとえば庭で雑草を抜いて、堆肥にして、豊穣性を保つために再利用するなど、異物を単に排除するのではなく、取り込みすることも非常に重要であると書かれています。

ここで私が重要だと考えるのは、固定的に見えるような秩序体系も本当は流動的ではないのか、ということ。つまりゴミをゴミとして見る文脈をもう一度見直すことが必要なのではないか。逆に言うと、秩序体系を変えることによって、廃棄物は廃棄物でなくなるという、今日講演される二人の発表はまさにそういうことではないかと思っています。

パッカーとカッチャーから見直す

インドには「パッカー」と「カッチャー」ということばがあります。「パッカー」とは、整ったも

の・本物という意味で、「カッチャー」は、不完全なもの・劣つたもののことを言います。とくに食べ物のやり取りの際に不浄性の伝えやすさが異なります。たとえば、不可触民として差別されてきた人たちは、不浄性が高い人たちとみられています。そして、その人たちから渡されるものにその人たちが持っていた不浄性がくっついていくという考え方です。それを受け取ると、不浄性を受け取ってしまうことになります。

その不浄性の伝わり方が食べ物によって違ってきます。インドでは手が入った途端に、不浄が始まります。生もの・調理されていないもの、たとえば割れていないヤシの実とか、米でも炊いていないものが一番良いとされています。次がパッカー食(揚げたもの)です。インドの屋台で揚げものが多いのは、パッカー食だからです。

一方でカッチャー食というのは、地域によって違いますが、炊いた米やチャパティ(インドの代表的なパンのひとつ)などの日常的な食べ物です。そういったものは不浄性を伝えやすいので、自分より下のカーストからは絶対受け取りたくない。これがカースト差別の表現・手段の一つです。最近はそのままで言う人はいませんが、少し前までは日常的に行われていました。

このパッカーとカッチャーの対立構造は、住宅の質の違いにも使われています。現在、パッカーハウスと言われているものはコンクリート造や煉瓦造の家で、安全で丈夫だと思われてい

ます。一方、カッチャーハウスは掘立て小屋や泥の家で、安全ではなく耐久性がないと思われる家です。インド政府は農村地域に住む貧困層を対象に補助金を出して、パッカーハウスを建てることを推進しています(補助金は、1家族に対し約20万円ほど)。

2024年2月に、西ベンガル州のサンタル族の村を訪れました。サンタル族とはインドの先住民で伝統的には泥の家(図3)に住んでいます。村の周りで手に入る材料だけで作った家で、壁に花の装飾など、私たちからみれば魅力的な家ですが、これはカッチャーハウスです。同じ村では、コンクリート造のパッカーハウスがほとんど建てられています(図4)。伝統的な泥の家はこの村でも数軒しか残っていませんでした。

しかし、実際に住む人に聞いてみると、みんな元の泥の家の方がいいと言います。涼しくて、実は長持ち。コンクリート造や煉瓦造の家がそれほど耐久性がないことはみんな知っているのです。けれども、お金がもらえらるし、見た目もちょっとかっこよくて、2階建てにできることが建て替えるの大きな理由です。けれど、そもそもサンタル族がジャングルから出てき



【図3】サンタル族の「伝統的」家屋(カッチャー)
(西ベンガル州、2024年2月撮影)



【図4】政府からの助成金で建てられたコンクリート造の家(パッカー)
(西ベンガル州、2024年2月撮影)



【図5】自宅改修前の暮らしの記憶/以前住んでいたキミコさんが、空き缶を並べて雨漏り対策していた名残り

た当初は彼らの家ももっと簡素な掘っ立て小屋だったはずですが。壁も屋根もありデザイン性もあるいまの泥の家は、かつてはパッカーハウスだったはずですよ。

ただ泥の家を排除していくのではなく、差別とも無縁に「直すこと・再利用すること」を社会全体で行うためには、新たな文脈の変化が必要ですよ。同時に、何をもちって整ったと感じるかという、リテラシーの問題も考えるべきだと思います。カッチャーをパッカーとして見直すことがリノベーションの一つのあり方で、それによってわれわれのタテモノ・リテラシーもあがるのではないかと思います。

「儀式は、枠組を設定することによって注意を集中させるのだ。それは記憶を刺激し、現在を過去の関連事項と結びつける。これらすべてにおいて、それは知覚作用を助ける作用をする。というよりはむしろ、それはわれわれがなにを選択すべきかという原理を変更するが故に知覚

作用を変質させるのである」(メアリー・ダグラス、同書163頁)。これは儀式についての一文ですが、住まいを整えることも似ていると感じました。

私は自宅のリノベーションの際に大量の資材を捨てましたが、なかでも捨てるのが憚られた同居住者・キミコさんの世界がありました。改修前は2階が雨漏りをしており、キミコさんが手元にあった缶で雨受けとしていた様子がそのまま残っていたのです(図5)。これもある種の貧しさでもあるのですが、聖性も感じられるものだと思います。無理にロマンス化するのはよくありませんが、カッチャーさを大事にしながらか、カッチャー世界の聖性を維持していくこともこれからは必要なのかなと考えているところです。

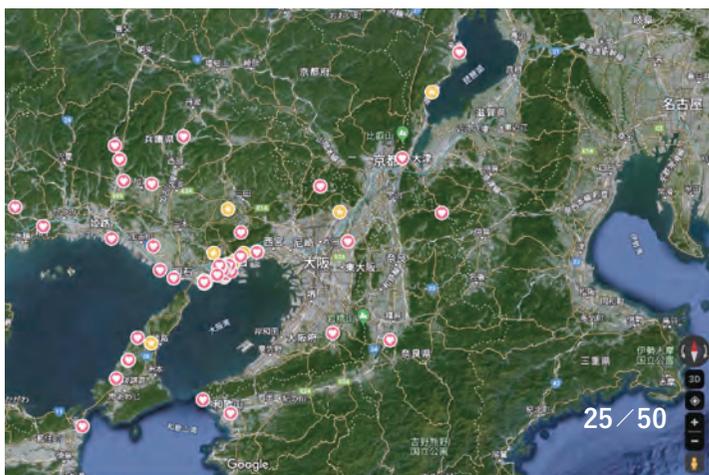
【参考文献】

- *1/Alexander, C&O'Hare, P(2023) "Waste and Its Disguise: Technology of (Un) Knowing," *Ethnosjournal of Anthropology*, 88(3): 419-443
- *2/メアリー・ダグラス『汚穢と禁忌』(ちくま学芸文庫/筑摩書房、2009)

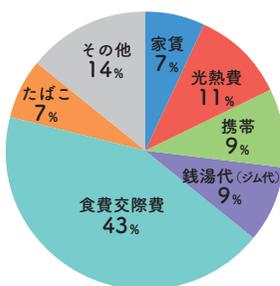
棄てられた住まいに手を入れる人びとがつくるコミュニティ

西村周治「級建築士事務所西村組 合同会社廃屋代表」

私は、「合同会社廃屋」という廃屋専門の不動産会社と「西村組」という設計事務所をやっています。関西一円で約50戸の家を修理しています。現在はその半数を直し終わった状況です「図1」。



【図1】合同会社廃屋+西村組で取り扱っている廃屋物件 ©Google



【図2】家賃5,000円のころの生活費内訳

当時の給与 70,000円	
家賃 (DJとVJが同居)	5,000円
携帯	6,000円
光熱費	8,000円
銭湯代 (ジム代)	6,000円
食費交際費	30,000円
たばこ代	5,000円
その他	10,000円

が、当時は家賃を3人で割って月5000円で消費支出のうち住居費の割合が高すぎて、「何でこんなに生きづらいのか」と思っていました。強制退去後に僕が買った家が1平米、約3800円でした。東京都中央区の一等地と比較すると天と地ほどの大差があり、それは自分にとってすごく気持ち悪いことでした。同じ土地なのになぜこんなに価値の違いが生まれるのか。建物を直せばそこに価値が生まれるのではないか。そのころはまだ何となく、価値の転換をしないと考えていました。



【図3】改修を行う有機的な建築集団「西村組」

完全に緑に覆われた建物を住みながら直して、ちょっとおしゃれに改装

生存戦略として廃屋に住む

なぜ廃屋を直すことになったのか……。大卒卒業後にフリーターをしていました。その時の月収が7万円くらいで、当時住んでいたマンションの家賃が払えなくなり、「来月から出ていってくれ」と言われ、どうにかしないとホームレスになってしまうという状況でした。

神戸の下町で町づくりや空き家改修に関わっていた大学の先輩の紹介で、生存戦略として月1万5000円で倉庫を借りて、住みながら直していくことを始めました。当時は、とにかくそこら辺で拾ってきたもので家を直していました。マンションに住んでいたころは、生活全体の消費支出のうち住居費の割合が高すぎて、「何でこんなに生きづらいのか」と思っていました。

住んでいたので、5000円あれば何となく生きていけるというような感覚がありました「図2」。先輩がやっていたグループの活動に参加させてもらいながら、安い倉庫10軒ほどをチームで直していましたが、ある時、地主側から「この土地を売る」といって、強制退去にありました。

ちょうどそのときにR不動産の神戸支店の立ち上げに誘ってもらい、それまではニートでしたが、そこから不動産仲介の仕事を始めることになりました。仲介業を通して分かったことは、基本的に建物の価値はゼロで、不動産の価値はほぼ土地であるということです。



〔図6〕バイソンギャラリー。共有キッチンと地域のアーティストが気軽に展示できる場所として開放



〔図7〕バイソンファクトリー



〔図8〕解体される建物から建材を拾う。写真は、解体される幼稚園園舎の許可を得て、床材を剥がしバイソンの床に再利用(下写真)



〔図9〕土壁の土を再利用して塗り直した壁



〔図5〕バイソンの廃屋改修前(上)、改修後(下)



〔図4〕神戸市兵庫区の空き家群「バイソン」

まちの「ゴミ」で家を直す——バイソンでの試み

現在、神戸市の兵庫区の山側の空き家群を「バイソン」という名の集落にしようと思って改修を行っています。ここにも自分の住居として買った家があり、その周りがほとんど空き家だったことが活動のきっかけです〔図4〕。

この廃屋は屋根がなかったので雨が中に入って畳が腐り、幼虫がたくさん住んでいま

して、おしゃれた雑誌に取り上げられたりもしました。1人で家を直すのは大変です。当時は、家も仕事もない暇そうな外国人が周りにいっぱいいましたので、そういう人を集めてチームを作って、家を直し始めました。〔図3〕。廃屋を直して、売ったり貸したりを7、8軒ほど繰り返しました。そうしてヤドカリのように、成長することに家を変えるにしたがって財産が増えていく状況が生まれました。

幼稚園の園舎の解体では、チームで現場に行ったりします。

とあるので、あらゆるものが捨てられている現状があります。そういうことは解体屋などの一部の人にしか知られておらず、非常にもったいないので、できるだけ解体現場へ行くようにしています。マンションのモデルルームが解体されて廃棄される前には、ガラスや断熱材をもらいに行ったりします。

した。その情景はとても美しかったのですが、それを僕たちの原理で直していきました。幼虫も、僕らも家を作ろうとしており、生き物の行為としてはそれほどやっていることは変わらないので、そこは肅々と綺麗に改修しました〔図5・6・7〕。

直すときに心がけていることは、まちのゴミで家を直すということです。以前、設計事務所バイトをしていた時に、いろいろなことがちぐはぐだと感じていました。基本的に見えないところで、あらゆるものが捨てられている現状



西村周治（にしむら・しゅうじ）

1982年 京都府生まれ。大学を卒業後、ポロポロの長屋を改装して住み始めたことを機にDIYに目覚め、神戸市内の廃屋を改修しつつ引っ越しを繰り返す。神戸R不動産の営業の経験の後、2018年に有機的な建築集団「西村組」を結成。無理をしない。を合言葉に日々廃屋と向き合う。一級建築士事務所「西村組」の組長、不動産会社「合同会社 廃屋」の代表。

き、許可を得て、床板を一枚一枚剥がして持ってかえりました「図8上」。それを洗って磨いてオイルを塗り、違う現場で張っています「図8下」。

このプロセスが結構長いので、買った方が絶対安いとは思いますが。経済的合理性からはちょっと離れていますが、幼稚園の元管理人さんが、床を再利用したアーティスト・イン・レジデンスに遊びに来てくれて、床を愛でるということがあったりして、それがなんかいいなと思います。

土壁も、一度、すべての土を落として、それに石灰を混ぜて練り直し、古畳を裂いた繊維を入れ、固めて再生して使います「図9」。建具も再利用できるところは再利用しています。

素人がつくる

西村組は全体の5分の1ぐらいが大工で、残りすべて素人です。ヒッピーのようにお金を使わない主義の人だったり、ミュージシャンだったり、アーティストだったり。旅行で来た外国人の方の割合も多いです。そういう人たちで家を直しているのですが、空き家はいくら

もあって、寝泊まりできるところは確保されているので、常に人を募集して、受け入れられる状態にしています「図10」。

また村の中では、お金のためだけに働くのではない、労働交換の仕組みを考えています。週1回仕事を手伝ってくれたら、タダで住めし、お昼ご飯も食べられるということで運営しています。

バイソンにはギャラリーがあるので作品展もしています。また、空き家を倉庫として使って、いろいろなところから引き取った材料をストックしています。材料は公に売っているわけではなく、知り合いの建築家が使ったり、コミュニティのなかでアーティストの作品にすることがほとんどです。

廃屋群を直さずにアーティストと遊ぶ

空き家問題って、あまり問題ではない感じもしています。統計からみても、確実に避けられない未来が待っていることは明らかなので、現象であると捉えています。実際に空き家を活用しようとしても、人間が少ないので、そもそもそ



【図10】バイソンギャラリーでの西村組の昼食風景

の活用自体が無理だと思っています。なので、最近は空き家を直さずに遊ぶことも実験的にしています。

バイソンは、車が入れない、階段でしか行き来できないようなブラック街です。その半分ぐらいを取得して、いろいろな活動を展開しています。

また、商店街の空き店舗の3分の1ぐらいを取得して、アーティストと一緒に作品を入れています。たとえば、空き家から出てくる仏壇仏具は人のけがれや怨念がこもっているので、間違いないくゴミ（捨てられないゴミ）にしかならない。そういうものを集めてライブ会場にしました。こ

の時は300人ぐらいのお客さんが来ました。アートには、イベントを通してものを浄化する可能性を感じました【図11】。

図12は「GIVE ME VEGETABLE」というイベントで、野菜を持ってきたら、タダでご飯が食べられるというものです。廃神輿を屋台がわりに使っています。こうしたイベント会場として廃屋と遊ぶということもやっています。

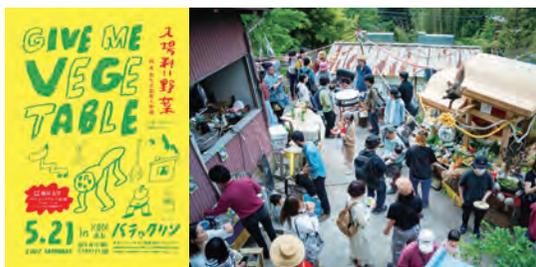
廃屋を直すには大変な労力がかかります。そもそも廃屋に需要がないので、それを直しても費用対効果が合わない。そういう状況が生まれる廃屋に対しては直さずに遊びます。たとえば、竹が生えていた廃屋では、ガラスの床にしてお茶会をしました【図13】。これは「竹に貸している家」です。竹の様子がとても美しかったので、もうそのまま竹のための住居として残し、そこに人間がお邪魔するぐらいの世界観で行ったイベントです。

別のところでは、廃屋を作品の台座に見立てて、その上に廃材で作った作品を展示しています。廃屋はアーティストのキャンバスとして、とても相性がいいと感じています。

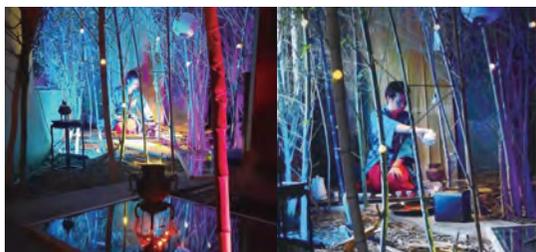
基本的にこういう試みはお金を生まないので、完全に持



【図11】廃棄された仏壇仏具を集めて行ったライブイベント(主催:々+石田延命所)



【図12】バイソンで行われた野菜が入場料のイベント(主催:池田義文)



【図13】竹の生えた廃屋をお茶室に。お茶会をした時の様子。



【図15】半人前大育成講座



【図14】廃屋大学

ち出しですが、それなりに人が来てくれるので収支的にはプラスマイナスゼロにはなっています。

いろいろなものを引き取って在庫しているの
で、時々、砂浜に家具などを置いて、それを投げ銭
で持っていけるようなイベントもやっています。

昨年は廃屋を使ったアーティスト・イン・レ
ジデンスや、「廃屋大学」といって、廃屋や廃材
に関わっている人たちをお呼びしてさまざまな
テーマで廃屋の可能性を探るイベントも行いま
した【図14】。また、西村組の若手には技術がない
ので、技術を継承するために「半人前大育成講
座」を開催して、溶接や木工の技術の継承もはじ
めています【図15】。

最近では、1、2週間に1件ぐらいのペースで「廃屋もらってくれへんか」という電話が関西一円からかかってきます。おそらく、海外の人たちの方が日本人よりも廃屋の価値を見出せるのではないかと思っていて、彼らに所有権を持ってもらい、住みながら直していくことで、若い人たち自身もつと面白がって、どんどん手を出していけるような環境づくりを主に考えながら活動をしていきたいと考えています。

産業廃棄物やありもので つくる空間の実践

一杉伊織 [株式会社TOOLBOX デッドストック工務店]

僕は、建築士と現場監督をやっています。リ

ノベーションの設計施工が本業ですが、これまで作り手として、ひたすらゴミで遊んでものづくりをしてきました。中学生ぐらいから人の生業(せいぎょう・なりわい)に興味があり、大学では民族学・考古学という分野にいました。どうやったら物が残っていくのか、残ったものに共通して見えるものとは何なのかを考えることが好きでした。

ときどき発掘の現場に建築家の方が来ることがあり、その時に初めて「建築」というジャンルを知り、とくに木造の建築や伝統建築に興味をもちました。建築で残していくことの面白さに魅了され、京都の専門学校に2年間通いながら、いろいろな職人の丁稚奉公をさせてもらいました。その後、古民家再生の設計事務所に勤務をして、木造の新築からリノベーション、古民家再生などの現場で、がむしやらに直す・残すということに取り組んできました。

ご縁があって、西村さんも所属していた東京R不動産に参加し、リノベーションやその価値

転用、運用の仕方考えた設計・施工を経て、「TOOLBOX」という内装建材のネットショップに合流し、エンドユーザー向けに建材を開発し、ネットを通じて提供をしています。

こうした活動と並行して、ゴミで空間を作る建築ユニット「デッドストック工務店」を趣味でやっています。今日はその活動の様子をお話したいと思います。

ゴミでものづくりをはじめまでの背景

僕の活動のベースには「ヒトの創造性の解放」が大きなテーマとしてあります。人はどういふものを作って、どういう生活をし、どんな時に化学変化が生まれるのかということを、残るものから考察していました。また、残す技術についても興味をもち、活かしながら残すという実践を行ってきましたが、「やっぱり、使われないと残らない」という思いが強くなり、ある時、供給者側としての限界を感じました。もっとユーザーの欲求を表に出していかなければいけないと思うに至り、ユーザーの創造性を解放するような活動に足を踏み入れるようになりました。

まず、家づくりの主導権がプロ側にあり、「供給者側の論理」を住まい手が受動的に受け取るを得ないような状況から、家をつくるためのさまざまな手立てをオープンにして、住まい手が主体的に住まいを組み立てていくという考え方に変えていくことにしました。家づくりの

「編集権」を、使い手にどんどん委ねていくことを、僕は「建築の民主化」と呼んでいます。

こうした発想で、東京R不動産では、住まい手の欲求を感化するような不動産のあり方を確立し、自分らしく「つくる」手立てとして、建材販売や読物コンテンツ、工事サービスを供給するプラットフォームを立ち上げました。

このように使い手の創造性を解放するような環境作りをした結果、「こんな使い方があるのか」とか「こんな発想があったのか」などユーザーからさまざまな反響があり、住むことを自ら求めるユーザーの力強さを日々実感しています。

デッドストック工務店の活動について

こうした住まい手の住まいへの欲求や発想を感化するような活動の一方で、僕も含めた作り手は果たして楽しんでいるのだろうか、と思うに至りました。供給者側として、創意工夫と



【図1】デッドストック工務店



【図2】ゴミを探すところからはじまる

いったことが失われているようにも感じるところもあり、「作り手の創造性も解放したい」と考えて、プロの作業環境をつくることにしました。たまの週末に草野球をやるように、全国のものづくりが好きな工務店のおじさんたちを集めてものづくりをする集団「デッドストック工務店」を8年前に立ち上げました〔図1〕。各地にいるメンバー同士の声かけにより年に4回ほど活動しています。

せっかくものづくりの好きな人が集まったので、僕なりに作業条件を設定しています。

一つ目は「計画をしない」です。あえて計画をせず、アドリブ的に始めてみることに。プロの集まりなので仕事にはならないように、純粹に「つくる」ことを楽しむのが大切です。

二つ目は、「素材はゴミか、ありもの」であること。「そこにあるもの」から何が作れるのかを考え、それを作る人たちが「そこにいる人」であること。つまり、人と素材は現地調達となります。

三つ目は、3日で作ることに。僕らは、それぞれ各地に戻れば建築の仕事があるので週末しか時

間を使えません。限られた時間の中での即興性やライブ性を大切にしています。

まず、いつも素材(ゴミ)を探すところから始まります〔図2〕。何年かやっていると、「あの辺にありそう」という嗅覚が効いてくるので、それを頼りに探しにいきます。さらに、「今回は赤いものだけ」とか、「金物だけ」というテーマを設けて、素材となるゴミを収集します〔図3〕。このときに大事なのが、「めっちゃいいね」とか、「それどこにあった？」など、みんなで持ってきたゴミを褒め合うことです〔図4〕。ゴミは現地調達が基本ですが、プロジェクトによっては自分の「自慢のゴミ」を持ってきて、「これを今回はどこかで使いたい」というケースもあります。それを僕たちは「ゴミヤゲ」と呼んでいます。こうして集まったゴミを囲んでみんなで褒め合っているうちに、作る時間がなくなってしまうこともよくあります。

次に、どうやってたら面白いかを試す作業をし

一杉伊織(ひとすぎ いおり)

株式会社OOBOX・デッドストック工務店。

1983年、静岡県生まれ。大学では考古学を専攻し、建築の世界に魅了される。京都での古建築留学後、古民家再生の設計事務所勤務。その後、東京R不動産に入社し、建材と内装のネットショップ「Eobox」の立ち上げに参画。設計・施工のサービスを取り仕切る傍ら、現場の目線を取り入れた商品開発を行っている。プライベートでは、廃棄物やありもので空間をつくる建築ユニット「デッドストック工務店」を主宰。



〔図3〕ゴミを集める



〔図5〕ゴミを試す



〔図4〕ゴミを褒める



〔図7〕ゴミで遊ぶ



〔図6〕ゴミでつくる



〔図8〕3日で帰る

らくつつけられるのか？」と、ひたすら時間をかけて考えます。徹夜にもなりながら、手を動かしつつ、目指すべきイメージに近づけていきます【図6】。そうして出来上がったもので、「遊ぶ」ということをゴールにして、ゴミの使い方を提示していきます【図7】。そうして、3日経ったところで「ちょっと仕事があるので」と、みんな帰るといのが一連の流れになります【図8】。

これまでの実作紹介

これまでに制作した実作を紹介します。

一つ目は、ある企業から「クリエイターのクリエイティビティを刺激するための空間を作りたい」というオーダーを受けて産業廃棄物をテーマに制作しました。

素材は、中間処理業者に行つて集めました。中間処理業者では、個人のゴミだけでなく、企業から集まってくるあらゆるゴミを素材ごとに分類されて、処理場に集まってきます。素材ごとにマテリアルが並んでいるなかから、吟味をして素材集めをしました。なかなか図面に落とし込めず、アウトプットしてクライアントにイメージの提示をすることもできないという苦しいなかで、基本的には1人でイメージに向けてコツコツと手を動かし、最終的には既視感のない空間ができました【図9】。

二つ目に、音楽フェスの主催者から、浜辺エリアを盛り上げるようなステージを作してほしい

というオーダーを受けました。ステージ台だけを作っても面白くないので、イカダのような船を作つて、その上で音楽の演奏をして、勝手に海に流れていけば面白いのではないかと、という発想から制作をスタートしました。

知り合いから竹やドラム缶などさまざまな用品をもらい、現地でビールメーカーの試供品の空き缶を利用したり、リサイクルショップの友人からも商品にならないものをもらつて、ひたすらみんなでペタペタ貼つて櫓のようなミニメントに仕上げました。ここがフェスの期間中、人が集まるインスタスポットとなりました。最終的には会場にいる人たちみんなで引張つて着水をさせたのですが、歓喜を上げて泣く人もいたほど感動的な演出となりました。一度は誰かが「いらぬ」と言つたものでものづくりをして、それが多くの人の心を動かすような原動力になったという状況が、とても逆転劇のような面白い状況だと思ひ、やりがいを見出したプロジェクトでした【図10】。

三つ目は、鹿児島市の鹿屋市にある人工湖で作つた記念ミニメントです【図11】。2016年の台風で壊滅的な被害を受け、ようやく整備が進んできた地域で、復興花火大会のために何か作つて欲しいというオーダーでした。素材が流木であるという情報がなく、事前準備もできないまま現地に行きました。すると、山の流木は基本的に丸太で、水を吸つてものすごく重い

ので、行政の人にも手伝ってもらいながら、みんなで運びました。会場となる湖畔は、何か棲みついていそうな場所だったので、大隅湖のオツシーと名前を付けて湖の主を作ることになりました。

素材は流木のほかに、その辺の椰子や廃校でいらなくなったアルミのトレーぐらいいしかありませんでしたが、それらを手作業でつけていきながら、2日間で出来上がりました。

花火大会も無事に終わり、子どもたちは、「龍がいるぞ！」といつてすごく盛り上がりました。その後も人気になり、地元の高校の演劇部のポスターや市のプロモーションのポスターなどに活用されました。そしてオツシーは、次の年の台風で流れて湖へと還つていきました。

四つ目は、ベトナムでオフイスをつくる依頼を受けた初めての海外の仕事です。行つてみると、そこには僕らが日本で頑張つてやつてきたような作り方や風景が普通にそこにありました。町中が素材に溢れていて、作つているのか壊しているのかわからない風景があり、取つてもいいのか、買わないといけないのかさえわからない状況が、とても刺激的でした。住み手も創造性に溢れていて、素材の使い方もとても上手だなと感じました。加工場があるリサイクルショップが多く、全然違うものに作り変えて販売していました。また、ネジのリユース一つをとつても、仕分けがされた状態で売られていた

り、ゴミも普通に買えて、運んでくれるサービスまで付いていて、ゴミを買う環境が整っていました。

捨てたらゴミ、拾ったら素材

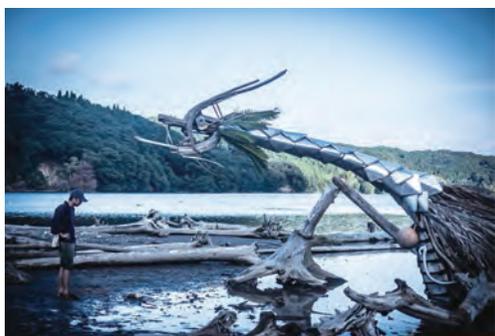
「作り手の創造性も解放したい」と、プロの工作環境の一つとして始めた活動でしたが、ゴミというのは、二つと同じものがあります。実際に、建築の職人がゴミを加工する場合、普段とは道具も違うし、やったことがないことなので、チャレンジになります。わくわく感とともに、技術、経験、応用力が試されます。また、素材をどのように加工すればよいかを瞬間的に考え、ゴミをピックアップしていく「素材の見立て力」や、「どうやったら違うものに転換できるか」という思考が研ぎ澄まされていくように感じています。



【図9】Star Lab.Tokyo (東京都、2019年)
ある企業の会議スペースの内装デザイン。中間処理業者に行き集めてきた廃材で構成。



【図10】森、道、市場。(愛知県蒲郡市、2018年)
音楽フェスの櫓(やぐら)のかたちをしたモニュメント。



【図11】RETURN OF THE OSSIE (鹿児島県鹿屋市、2019年)
鹿屋市の大隅湖復興祭の記念モニュメント。復興祭の3日前に現地入り、2日間で流木を使って作成。



【図12】イベント中、雄叫びをあげて参加している様子

ます。

その都度拾ってきたもので、毎度違うものができるのですが、どこかで見たことのあるようなもので構成されている「痕跡のあるデザイン」が、見る人に懐かしさや親しみを感じさせます。そして、ゴミを提供してくれた人たちも、「提供したものが、あんな風になっている！」と言つてすごく喜んでくれて、誰かが使っていた「何か」が、よりリアリティを持ってデザインに落とし込まれていくところが面白いと思つています。

また、想像しているよりもゴミ好きの人が結構いて、作る意欲にあふれる人や創造的でありたいと思う人たちのコミュニティがゴミで繋がりは始めています。ただのゴミを、みんなの力で組み立てた結果、そこに空間が生まれ、そこに人

が集まってくるということがわかってきました。

そして何より、すごくアドレナリンが出ます。図12の写真は音楽フェスで作ったイカダを引いているときの僕の雄叫びの隠し撮りです。この写真をみた妻から「こんな顔をして本気でやっているならしょうがない」と言われて、この活動の許可を得たという経緯があります。自分でも、こんな表情をしているのかという驚きもありながら、この活動を通して新しい自分に出会えているという感覚があります。

僕らがいつも言っているのは「捨てたらゴミで、拾ったら素材」ということです。ゴミという概念が、使うか、使わないかで変わってしまうところなど、ゴミを素材として「もの見立て」という視点から光をあてていくと、さまざまな可能性があると感じています。

デイスカッション

●前田(司会)——3名の

登壇者の方々、大変面白いお話をありがとうございます。とくに実践者

である西村さんと一杉さんがやられていることに関して、研究サイドから池亀さんはどのような関心をもちましたか。

●池亀——お二人の活動

に、人が集まってくるところが面白いですね。私の話で、「タテモノ・リテラシー」と言いまし

たけど、お二人の活動とも、感覚が研ぎ澄まされていて、その技術とか、見立ても、カッコよさも、ちょっと今までとは違うかたちですよ。雑草的でありながら、西村さんは大地主になっているという逆転も面白くて、「お金持ちではない富」というような、多元的な「富」のあり方を感じることもできました。

●前田——西村さんも一杉さんも、たくさんのゴ

ミや廃屋から、ある種の見極めをしていると思います。西村さんの「全部は引き受けられない」という話がありました。使えるものと使えないものの見定めはどのようにされていますか。



池亀彩氏



前田昌弘編集委員

●西村——場所が近ければ引き受けます。あ

とは構造の状態で、とくに1階の柱の根元がどれだけ傷んでいるかにより。最初は柱がない状態の廃屋でも引き取って直していましたが、すごく時間がかかるので、件数が増えていくと手が回りません。今は構造躯体が何%ぐらい生き残っているのか、直しやすいかどうかで決めています。

●一杉——僕の場合、

イベント屋として呼ばれて「前例がない、見たことのないもの」が目的になる場合には、「初めて見たようなアウトプットができそうな素材」とか、「みんながワーツと歓声があがるかどうか」で取捨選択しています。

だけど、イベントにおいては意外とプロの技は必須ではなくて、参加者が単純労働を集積してできる作業、土をこねたり土を運んだり、頑張つて汗をかければできる作業に対して、若い人たちが集まったり歓声を呼びやすいと感じています。

編集委員からの質疑応答

●前田——編集委員の方々にもコメントをお願いします。はじめて、大月委員長いかがでしょうか。



西村周治氏



一杉伊織氏

●大月(編集委員長)——

池亀さんのカッチャーとパッカーの話は、われわれの歴史や文化の中にもたくさん潜んでいるような気がしました。

私は昔、同潤会アパートの保存活動をやっていました。1990年代には誰も見向きもしていません。「なんであんなボロいものが好きなの」とか「お前も変わったやつだな」と言われっぱなしでした。今になって「どうして大月さんの時代に壊させてしまったのか」と状況が逆転していて、そう言われないうちにも戦わなければいけない、とずっと思っていました。みなさんの場合は、「パッカー」を形成している主流な価値観のようなものに対して、どのような挑み方をされているのか、お伺いできますでしょうか。

●一杉——「一般化されて考えなくなったスタンダード」に対して、柔軟性をもたせたいと思っっています。そのために、まず自らが実践し、そこに少しずつでも共感をしてくれる人たちを広げていくこと。そうして9対1から、8対2ぐらいにはなりたいという気持ちで挑戦しています。

●西村——僕らが借りていた長屋を強制退去させられたあと、一帯がワンルームタワーマンション街のようになりました。それが「お金を稼ぐためのウサギ小屋」にしか見えなかったという経験があります。そういう原理原則で建物ができてしまうのであれば、自分はその唾を吐いて全然



大月敏雄編集委員長

違うことをやりたいという気持ちで、いまの活動も、社会的に無価値化されたものを若者が直して自分の場所を作っていくことがめっちゃくちゃかっこいいというアンチの立場をもってやっているつもりです。

●池亀——以前、イギリスに15年ぐらい住んでいた時に、ホームパーティでおじさんたちが招かれた家の台所のタイルについて「どこのタイル？」とか「どこのブランド？」とか話をしていたことに衝撃を受けました。イギリスでは家を直す時も工務店に頼まずに直接職人を雇うので、タイルは自分で買いに行きます。それと同じようなことを日本でもやれないのかなと思うことがあります。

私の場合は、個人的な試みのひとつに過ぎませんが、幸いに京都には職人も残っていて、人の繋がりや、小さいレベルでのビジネスが成立しているオルタナティブな場所だからこそ、できることがあるとは思いました。

●権藤(編集委員)——既存の秩序のなかで、環境、資源循環を唱えているような人たちは、自分の手で家を壊した経験



権藤智之編集委員

もなければ、ゴミ捨てるといくらかかるかということさえ知らなかったりします。西村さんや一杉さんはそういうことも知りながら、実際に手を動かして、廃棄物を利用して、空き家問題さえ解決している。設計・計画するものに合わせて材料を揃えていくのではなく、まずものがあって、それ

に合わせてどうするかというやり方は、従来の職能を変える契機にもなるのではないかと思いきながら話を聞いていました。

今日は、西村さんの「廃棄された仏具」の話がとてもおもしろいと思いました。不謹慎の一手前みたいな感じですが、空き家問題が顕在化している現在では、誰もが「仏壇の処理困るよね」と納得できる場所がある。きつと今ならそんなに叩かれることもないと思います。そういう意味で、エシカルや秩序、何が正しいかというようなことが変わりつつあることの象徴のように感じました。

●饗庭(編集委員)——僕はリテラシーという言葉



饗庭伸編集委員

できたらいいなと思いつつ聞かれました。政治学者の宇野重規は、リテラシーとコンピテンシーという言葉を使っています。リテラシーはある基準に合わせて判断する力。コンピテンシーは、その場に合わせた物事を判断していく力、という理解をしています。つまり、市民運動などは、リテラシーばかり言っても変わらないので、コンピテンシーを最大限に使って社会を変えていくような考えの方が面白い。おそらく西村さんと一杉さんがやっていることはコンピテンシーなのではないか。

たとえば、僕がDIYをやっていると、子どもが横でセロテープでいろいろなものを作り始

めたりします。それをDIYに組み込んでいくことがコンピテンシーだと思っています。セロテープしか貼れませんが、というような人がいるときに、みんなどうやっていくのがよいのか、その形を整えていくことが大事なのかなと思います。

二つ目は、私は都市計画が専門です。これからは間違いなくまちは空き家であふれ、目に入るものの3割ぐらいが空き家という状態になっていく。そのなかで、ゴミと一緒にある状態をどう創造するのか、どのようにゴミと生きていくのかというところに興味があります。一杉さんが紹介されたベトナムの雰囲気も面白くて、あれもゴミともある状態ですよ。これからどんな都市風景が現れてくるのか、お伺いしてみたいところです。

●池亀——インドの先住民が住んでいるところを回ったときに、鬱蒼としたジャングルを想像していたら、林や森がスカスカしていました。これは人の手が入っているためで、まだ木を伐って燃やしてご飯を作ったりしているからです。日本の方の方がよっぽど鬱蒼としている状態で、こういうことが都市の風景にも起きていくのかなという気がしています。

今、農村では獣害が多くて農業もままならない状況になっていますが、都市もワイルド化していて、これからどうなるのか私も気になってます。ベトナムやインドのゴミは、リアルな資源で、低賃金で働く人たちがたくさんいるのでゴミ

の分類もされています。一方、日本は人口も減っていて、放置されたゴミが大量に出てくると思います。もしかすると建築や土木でも解決できないような状況になっているのかなという気はします。

●西村——今後、空き家が大量に生まれ、価値のあるゴミがそこら中にある状況となります。これからは、それをどれだけ愛でられるかが必要になってくると思います。一つには、汚れ（よれ）を受けいれる文化も育んでいかないといけないと思っております。

廃屋で竹林になったところは茶室にしたり、公園の一部のような使い方などさまざまな可能性があると思います。楽しい違和感が生まれたら、そこに愛が生まれるのではないかと思っております。

●一杉——普段の暮らしのなかでゴミを捨てることはあっても受け取ることはあまりなくて、受け取らざるを得ない状況に



一杉伊織氏

はなかなか追い込まれません。僕が構想しているのは、捨てたい人が自由に捨てられて、取りたい人が自由に取っていきけるような公共のゴミ捨て場（ゴミ置場）が作れないかと考えています。

●饗庭——汚いものが汚い状態で街の中に見える状態を覚悟しなければいけない。自治体の方からも「空き家をなんとかしてくれ」と相談されることがありますが、もうそれに慣れるしか

ないので、慣れ方のPRをしようという話をしていきます。認知症の高齢者がかなり増えて、排泄の問題も含めて結構大変なことがある。それもわれわれは、きつとこれから慣れていくことなのだろうと思いました。

●中嶋（編集委員）——私は、空き家とか、捨てられたものの価値をどのように転換していくかということについて改めて考えさせられました。たとえば古い建物が



中嶋節子編集委員

文化財的な価値に変わったり、あるいは材料的な価値に変わったり、再生していくときのエネルギーが変わるといった価値の転換が、それぞれの文脈のなかで行われている様子が見られました。そうした価値転換が、ある共同体のなかで共有されるだけでなく、さらに広域的な世界において共通の言語や新しい価値として認められていくのではないかと感じました。

私からお伺いしたいのは、皆さんにとつての「廃材とは何か」ということです。今回は「廃棄物でつくる」がテーマですが、廃棄物って人によって違うと感じています。たとえば文化財を直している、ゴミとか廃棄物という概念はまずありません。使えるものは徹底的に使い、使わなかったものは残して、それを歴史的な資料として保存する考え方です。どこからが廃棄物なのか、そこにグレードやスケールはあるのかお伺いしたいと思えます。

もう一つは、それぞれ遊びながらいろいろなものを作っていました。それが終わった後は、またそれがゴミや廃棄物になるのか。もう少し長い時間で捉えたときに、自分たちが作った先について、イメージされていることがあれば教えてください。

●一杉——活動のなかで言えば、今のところ遊べる素材が廃棄物です。新しい素材としてアウトプットしやすい楽しい素材と捉えています。僕は「TOOL BOX」で建材の流通を扱っているので、廃棄物をどうやって二次加工し、二次流通の場に乗せられるのかについては考えてきた方ですが、なかなか難しいのが現状です。今のところ廃棄物は、楽しく遊べる素材としてアウトプットするしか手立てがありません。

廃棄物は僕にとつては魅力的な素材ですが、いろいろ作ってみた結果、単純にゴミになっているのは事実で、結局何にもなっていません。作ったものがずっと残るようなものでもないし、かたちを変えて誰かに使われることも起きていないのが現実です。だけど、何か残らなくても、それをきっかけに人の感動や交流、つながりなどができていて、僕としてはそうしたかたちで昇華させているつもりです。

●西村——廃棄物というのは、シンプルに建材として捨てられているもので、こちらが使えるかどうかだと思えます。使いやすいのは、同じパターンで、素材として木、タイル、断熱材といった割とシンプルな建材であるかどうかですね。

●中嶋——西村さんは経済的なことを結構考え
ていらつしやるのが意外でした。流通できる
もの、経済的にしつかり利回りが取れることが考
えられていて、さらに興味もてたところですよ。

●西村——ヒッピーや
浮浪者みたいなので、よ
く職務質問をされます。
僕のまわりも似たよう
な人ばかりです。だけ



西村周治氏

ど、本当にヒッピーになってしまったら、何を生
産しているのかわからなくなって、みんながご飯
を食べられない状況になってしまうので、それは
避けたいと考えています。

仕事として、廃屋を生業としながら、アナーキ
ストたちと一緒に普通の仕事をする部分もあり
ます。たとえば舞台美術やアーティストの制作
の手伝いなども仕事になっていたりします。

●池亀——私はリノベ
ションといつても、ほ
とんどのが残せず、
大部分を解体屋に持っ
ていってもらいました。



池亀彩氏

そのなかのものが一つでも西村さんのところに
たどり着いてたらいいなと願うばかりです。一
方で建物自体は残せた、という想いはあります。
土台は腐っていたので、ジャッキアップして綺麗
に直しました。そういう意味では、自分よりもこ
の建物は長生きすると思います。やり方によつ
ては、人生よりも家の寿命の方がやはり長いと感

じています。

●柴田(編集委員)——

カッチャーとパッカー
という概念が非常に面
白いなと思いつながら聞
いていました。



柴田建編集委員

前号のすまいろんの特集「住宅地の限界を超
えて」(2024年冬号)では、限界ニュータウン特
集をしました。郊外戸建住宅地につくられた庭
付き一戸建てはまさにパッカーで、みんな勝ち
組だと思っていたものが、実はだんだんとカッ
チャー化してきています。前号の特集の趣旨
は、それをパッカーとして何とかギリギリ守れ
るのか、あるいはカッチャー化するのであれば
どんな可能性があるのか。アートの使うとか、
移住者向けに買うとか、そんな議論をしていま
した。今から振り返ると、そうはいつてもパッ
カーの世界から見たカッチャー的なものを扱っ
ていたのかなと思っていて、今回の特集では完
全にカッチャーに振り切ったときの可能性を見
せてもらった気がします。

西村さんは、周りにマンションが建つような
パッカー的世界の中で、どういう折り合いをつけ
ているのでしょうか。とくに地域との関係、町内
会とどういう態度で関わられているのかを簡単
に教えていただければなと思いました。

●西村——場所を選ぶうえで、どうい
う人が住んでい
るのかはリサーチしています。そこに気
が合うアーティストたちがいて、そこがハブに

なりそうであればやります。逆にいうと、そこ
にコネクトできる人がいないとやりません。

僕たちの場合は、地域の自治会の委員にも
入っていて、活動を手伝ったり、繋がっていま
す。けれども、それは地域貢献のためではあり
ません。集まって来てくれた人が、「ここだつ
たら生きていける世界」をつくるのが目的な
ので、地域に対してのメリットを考えてはいま
せん。だから「ヒッピーみたいな人がいっぱい
いる」と言われることもありませんが、嫌われ
てはおらず、何となく受け入れられています。

●前田——今日はとて
も刺激的な話ばかりで
した。研究者としては、
大きな社会課題に対し
てどう向き合うべきな
のかという宿題をいただいたように思います。



前田昌弘編集委員

これからますます増え続ける膨大な量の空き
家を全て背負うことは到底できません。少なく
とも、その活用とか除却では到底立ち向かえな
いので、今日のテーマのように、向き合い方を
変えるとか、あるいは言葉を変えるとき、組み
合わせを変えるとき、その戦い方を考えない
といけないと感じました。また一方で仕組みの
ところも大事なことで、カッチャー側から実践さ
れている方の話のなかに、多くのヒントがありま
した。それを記録して、伝えていくことが使命
なのかなと感じました。

ごみ屋敷とは何か——モノが語りだす家

梅川由紀【神戸学院大学現代社会学部 講師】

いわゆる「ごみ屋敷」

玄関をあけると、すぐに独特の臭いが鼻につく。同時に、涙やくしゃみが止まらなくなる。玄関・リビング・キッチン・風呂場・トイレに至るまで、さまざまなものが脈絡なく人の背丈まで積みあがっている。家の中を歩いていると、時折「ふにゃっ」という柔らかい感触が足に伝わることもある。何かを踏んでしまったのか、床板が腐っているのかわからないが、確認のしようもない。黒い壁紙だと思ったものが、壁一面に張り付いたコバエだったり、堆積するものの圧でふすまが破れていたこともある。——このような、いわゆる「ごみ屋敷」は、近年社会問題の一つとして理解されている。メディアなどで取りあげられる機会も増え、世間の認知度は高まる一方、当事者やこうした住宅と実際に向き合った人は少ないのではないか。そこで本稿では、ごみ屋敷とはどのような場所であるのか考察したいと思う。具体的には、筆者が2015～2017年に実施した、ごみ屋敷の当事者へのフィールドワークとインタビューをもとに検討する。

はじめに、ごみ屋敷の基礎的な知識について簡単に説明しておきたい。彩の国さいたまづくり広域連合Gizeeroチームの報告書によれば、ごみ屋敷とは「『ごみ』が敷地内外に溢れかえっている建物のことで、住民からの苦情や戸別訪問などにより認知しているもの。なお、ここでいう『ごみ』とは所有者の意思によらず、通常人が見て『ごみ』と

判断できるもの」*1と定義されている。環境省による全国1741市区町村への調査では、2018～2022年度（調査時点は2022年9月末の間に、ごみ屋敷を認知していると回答した地域は661市区町村（38%）におよび、件数は5224件にのぼる*2。ごみ屋敷によって引き起こされる問題としては、以下6点があげられている。①防災・防犯機能の低下、②ごみなどの不法投棄などを誘発、③火災の発生を誘発、④土壌汚染や水質汚濁のおそれ、⑤病害虫・悪臭の発生、⑥風景・景観の悪化、である*3。現時点では明確に対応できる法律は存在しない。そのため対策としては、条例で対応を試みる自治体もある。たとえば、条例に行政代執行法にもとづき強制撤去できる旨を記載する自治体もある。あるいは、福祉機関などが中心となり、当事者と向き合い問題解決を試みる地域もある。学術分野における主要な研究状況を整理すると、福祉学では、ごみ屋敷を「社会的孤立」の問題と捉えている。社会的孤立とは「家族や地域社会との交流が、客観的にみて著しく乏しい状態」*4を指す。看護学では「セルフ・ネグレクト」の一つのパターンと捉えている。その定義は「セルフ・ネグレクトとは、高齢者が通常一人の人として生活において当然行うべき行為を行わない、あるいは行う能力がないことから、自己の心身の安全や健康が脅かされる状態に陥ること」*5（傍線原著ママ。原著では全て太字）である。精神医学では「ためこみ症（Tarding Disorder）」として理解されている。ごみ屋敷は、おおむね

2006年ころから社会問題化したと考えられ^{*6}、比較的新しい社会問題である。それゆえに、これからますます研究が求められる対象といえるだろう。

ごみ屋敷の当事者Aさん

それではさっそく、筆者が調査を行ってきた「ごみ屋敷の当事者Aさん」について紹介したいと思う。Aさんは60代の女性である。独身で、ペットの猫と共にアパートで暮らしている。おしゃべり好きで、約束や時間を守る几帳面さを持ち、記憶力に優れている。部屋の中は人の背の高さまでモノがため込まれている。

特徴的なのは、ため込むものの約8割を未開封の食品が占めることである。食品であれば賞味期限が切れていても、腐っていても、虫がわいていても捨てることはない。たとえば、ヨモギ餅のように緑色に変色したミカンも、賞味期限切れのちくわも、炎天下に放置された煮物も、茶色いビンが真っ白に見えるまで大量の白い虫がついたジュースも捨てないと主張する。食べられないことを伝えても、「大丈夫、大丈夫」「要るの」などと言い、捨てることを拒否する。

一方で、食品以外のものについては捨てることもある。たとえば、清潔で、おしゃれなデザインの赤い傘があった。Aさんは赤い傘を「これも捨てる」と言った。まだ使えることを示しても、ためらう素振りはなく捨てた。Aさんは毎日スーパーに出かけ、買い物をする。特筆すべきは、スーパーでは店員、客、偶然出会った知り合いなど、さまざまな人と会話をすることである。時には立ち話では飽き足りず、スーパーのイトインコーナーで一時間程度話し込むことすらある。Aさんにとってスーパーは社交の場となっている。

モノ屋敷・モノにあふれた家

Aさんの暮らしを通してまず思うことは、Aさんはなぜ食品を溜めこむのかという疑問である。それは別稿^{*7}で明らかにした通り、Aさんが溜めこむ食品には、過去の大切な思い出が込められているためである。具体的には「スーパーで他者と良好なコミュニケーションを図った時の思い出」が込められており、その思い出を保存している。先述の通り、Aさんにとってスーパーは社交の場であり、食品を購入する際は多くの人とコミュニケーションを図っていた。たとえば、ペットボトルを箱買いした時には、スーパーの店員とやり取りをしていたし、特売のクッキーを購入した時には、スーパーにいた友人や顔見知りとのやり取りがあった。Aさんは「他者と良好なコミュニケーションを図ることができる自分の姿」を好ましく思っていた。そのような「望ましい自己」を実現した証として、その時の思い出が込められた食品を溜めこんでいるのである。従って、家に溜めこまれた食品について尋ねると、その食品を購入した際に他者と交わしたやり取りを楽しそうに語られる。つまりAさんにとって食品は食べるためのものではなく、大切な思い出にあふれるものであり、「望ましい自己を実現した証」なのである。ゆえに食品が腐っていても、賞味期限が切れていても、Aさんにとって食品はモノであり、ごみではないのである。

このようにAさんの行動を理解すると、Aさんの家をごみ屋敷と表現することには違和感をおぼえる。なぜならば、少なくともAさんの視点に立った時、Aさんの家のごみであふれているわけではないからである。ごみであふれた「ごみ屋敷」ではなく、モノであふれた「モノ屋敷」といえるだろう。さらにいえば「屋敷」という表現も、どうもしっくりこない。なぜなら、屋敷という言葉には独特のイメージが含まれているように思うからである。たとえば「化け物屋敷」のようなおどろ

おどろしいイメージや、「武家屋敷」「大名屋敷」のような、古めかしさや重厚なイメージを抱く。屋敷という言葉を用いると、Aさんの実際の暮らしや状況を無視して、言葉のもつイメージに引っ張られてしまうように思うのである。従って、冒頭であげた彩の国さいたま人づくりに広域連合Gierochimの定義とは異なるが、Aさんの住宅の状況を適切に表現するならば、「モノにあふれた家」という表現が適切であろう。

モノ語り

ごみ屋敷の調査をしていると、社会福祉協議会など福祉関連の職員の方とともに、当事者の家の片づけ作業に参加させていただくことがある。当事者が、これからもその地域で安心して暮らしていけるように、家の片づけを手伝う作業である。筆者がかかわった片づけ作業は、当事者に一つずつモノを見せ、要るか要らないか尋ねながらモノを整理する作業であった。筆者は先のAさんを含め、数件の家の片づけ作業に立ち会ってきた。

このような片づけ作業とは、ごみ屋敷のモノとの対峙を求められる時間となる。そしてモノと向き合っていると、多くの気づきを得る。たとえば、同じようなモノがたくさん出てくると、「ああ、この人はこういうモノが好きなのかな」と感じた。旅行先のお土産らしきものが出てくると「旅行が好きだったのかな」と思い、仕事に関連しそうなモノがでてくると「こんな仕事をしていたのかな」と想像した。手紙やら書類やらが束になっていたり仕分けされていると「几帳面な方なんだな」と思った。このように、当事者とはほとんど会話をしたことがなくとも、当事者の生活、性格、人となりや家を家に堆積するモノが語りだし、筆者はそれを聞いているような気がするのである。

これは、モノが所有者について語る「モノ語り」と表現できるだろう。

家はその人の生活や生き方が詰まった場で、そこに立ち入るだけで、モノからこんなにも多くのことを理解できるのだと感じた。ただし、モノ語りは当事者本人から話を聞くのとは異なり、本人が話したいことも、話したくないことも全てそのまま覗き見する感覚に近い。あるいは第三者が知りたかろうと、知りたくなかろうと、次々にモノが語り続けてしまう。ゆえに片づけ作業は、大きな精神的疲労をとまなうものである。ごみ屋敷とは、このようなモノ語りにあふれる場所といえる。

ごみ屋敷にみる可能性

これまでの議論をふまえて、本稿の「ごみ屋敷とはどのような場所であるのか」という問いに答えを出すならば、「ごみ屋敷とはモノにあふれた家であり、モノ語りにあふれる場所である」と結論づけることができるだろう。

ごみ屋敷の調査を通して改めて感じることは、誰がみてもごみといえる「完全なごみ」を示すことは難しいということである。それは、Aさんの家に堆積するものは周囲の人々にとってはごみであっても、Aさんにとってはモノであった点からも明らかだろう。同様に、「完全なごみ屋敷」なるものも存在し得ないだろう。それは逆の見方をすれば、ごみをモノと捉えるチャンスが大いにあることにほかならない。この意味で、ごみ屋敷は可能性にあふれているといえるだろう。身のまわりの対象について少し視点を変えて捉えるだけで、さまざまな変化が生じうる。さらに現代社会は、ごみを客観的に判断する圧力が高まっているようにみえる。本来、対象がモノであるか、ごみであるかは所有者の判断による。しかしながら現在は、より客観的な判断が求められ、社会的にごみと判断される場合は、捨てるのが「ふつう」であり、捨てない場合は「ふつうではない」とみなされるのではないか。

ごみ屋敷というと、自分とは縁遠い存在であると思う人が多い。し

かしながら誤解をおそれずいえば、誰もがAさんにとつての食品のよ
うな想い入れのあるモノを持ち、それらのモノがモノ語りをしている
ように思う。ごみ屋敷を通して、私たちのモノ、ごみ、所有、廃棄のあ
り方を、改めて見つめなおすことができるだろう。

〔主要参考 引文文献〕

- *1／彩の国さいたま人づくり広域連合Greenroomチーム、2010、「地域の生活環境問
題の解決に向けて——ごみ屋敷を通じて考える」彩の国さいたま人づくり広域連合「平
成22年度政策課題共同研究報告書」、1～91頁(引用文7頁)(2023年4月8日
取得。 [http://www.hirozukunft.or.jp/wp-content/uploads/2010_kenkyuhoukokusho-
hingenvironment_2020304.pdf](http://www.hirozukunft.or.jp/wp-content/uploads/2010_kenkyuhoukokusho-
hingenvironment_2020304.pdf))
- *2／環境省環境再生・資源循環局、廃棄物適正処理推進課、2023、「令和4年度「ご
み屋敷」に関する調査報告書」(2023年4月3日取得。 [https://www.env.go.jp/
content/000123210.pdf](https://www.env.go.jp/
content/000123210.pdf))
- *3／辻山幸宣、2013、「自治体における「ごみ屋敷」への対応策とその手法」宇賀克也編
『地域科学』まちづくり資料シリーズ28「地方分権」巻13「ごみ屋敷対策等の実効性を確保
する環境対策条例の立法と運用——コミュニティ再生のための行政・議会の役割」地域科
学研究会、1～27頁(引用文・18頁)
- *4／内閣府、2010、「平成22年版高齢社会白書」、(引用文・52頁)(2023年4月9日取
得。 https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2010/zenbun/pdf/15ss_1.pdf)
- *5／津村智恵子・入江安子・廣田麻子・岡本双美子、2006、「高齢者のセルフ・ネグレクト
に関する課題」『大阪市立大学看護学雑誌』2、1～10頁(引用文・2頁)
- *6／2006年ごろとした根拠は、主に以下二点である。第一に、『京都新聞』2015年2月
8日朝刊19面、『静岡新聞』2014年12月17日夕刊5面、『沖縄タイムス』2014年12月
16日朝刊19面の記述内容から判断した(いずれも記事の内容は同じ。全て日経テレコン21を
用いて、京都新聞・静岡新聞は2017年11月23日、沖縄タイムスは2015年1月28日に
閲覧)。第二に、積極的にごみ屋敷対策を行っている豊中市社会福祉協議会において、ごみ
屋敷関連のプロジェクトが設置された時期であることから判断した。なお、豊中市社会福祉
協議会に関する情報は以下を参照した。勝部麗子、2011、「地域と人を再び結ぶコミュ
ニティソーシャルワーカー——ごみ屋敷支援の取組を通じて」『月刊自治研』53(6)16、54
～60頁
- *7／梅川由紀、2017、「『ごみ屋敷』を通してみるごみとモノの意味——当事者Aさんの事
例から」『ソシオロジ』62(1)、23～40頁

梅川由紀(うめかわ ゆき)

1984年埼玉県生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。神戸
学院大学現代社会学部講師。専攻は環境社会学。

〔主な著書・論文〕『現代社会の探求——理論と実践』(共著、第3章担当、学文社、2023年)、『ご
み屋敷』を通してみるごみとモノの意味——当事者Aさんの事例から(『ソシオロジ』第62巻1号、
2017年)など。

解体祭——建築の「終わり方」を考える時代に

二瓶雄太 【東京大学 修士課程 一般社団法人ASIBA代表理事】

「始めること」は簡単だが、「終わらせること」は難しい。

これは建築という文脈ではなくとも、一般的に共感される感覚的なのではないだろうか。終わらせることにともなう責任や未練とどう向き合うのか。人口が減少し、都市が縮小し、良くも悪くも至るところで「終わり」が顕在化している現代において、よりよい終わり方を模索する試みは増えている。

建築分野もまた、終わり方を考えなければいけないフェーズに入っている。これまでは設計や施工、運営、改修など、生産する行為ばかりに光が当たってきたが、そうやって生み出された多くの構築物はよりよい終わり方を検討する余地もないまま、地上からも記憶からも消し去られていく。解体は可能な限り早く行われ、その残骸は記憶や意味などの文脈が剥ぎ取られた廃棄物として処理される。建設リサイクル法の施行以来、資源循環という側面では解体分野に大きな進歩があったが、それもあくまで分別や再生利用といった手法の浸透にすぎない。そもそも建築にはモノ以上の



【図1】解体対象の農具小屋。解体祭の数ヶ月前の様子。

なにかが含まれているはずで、建築が生まれ利用されていく間に蓄積されたそのなにか、記憶や関係性や愛着といったものと改めて向き合うための契機として解体は行われるべきではないだろうか。本稿では建築のよりよい終わり方に関する議論の提起として、2023年9月に広島県の佐木島にて執り行った「解体祭」について紹介する。

解体祭という取り組み

2023年の春、東京大学大学院権藤スタジオと国際建築スクール「Re・De・School」河野直、ブライアン・オルテガ・ウェルチ、河野桃子、河本吉重は広島県の佐木島を対象に、人口減少と高齢化が加速する離島の未来を描くデザインスタジオ「解体と再構築：Decon/Recon」を開講した。佐木島では直近60年の間で人口が5分の1程度の600人まで減少、高齢化率は70%に到達し、空き家が着実に増加している。そのような空き家のほとんどは解体されることなく放置され、時間とともに朽ちていくが、縮退していく現実を傍観するのではなく前を向いて未来を考えようと、本スタジオでは「解体」という行為に積極的に光をあてた。一見後ろ向きな行為として捉えられがちな「解体」を、島の豊かな自然環境や独特の歴史、個人的な記憶などと改めて向き合うための契機とすることを目指した。

最初の解体祭の対象として、島の西側に建つ小さな農具小屋を扱った。島で唯一の澱粉工場を営んでいた家族が農業に利用していた小屋で、見た限りでは特筆すべき個性もないただのトタン張りの平屋だった【図1】。もう長らく利用されておらず、持ち主も今後の土地利用などを考慮してそろそろ解体したいという意向であったため、それならばと、初めての解体祭にご協力いただいた。

痕跡から記憶を紡いでいく

物理的な解体のプロセスに入る前から、「終わり」に向けて準備が行われた。まず、この建物や場所、あるいはその内外にあるモノの履歴を調査す

ることで、この建築がいかにかに生きたのか、誰と関わり、島のどのような要素と互いに影響し合いながら今へと至っているのか、その変遷を読み解いた。具体的には、建物全体の3Dスキャンや部材のデジタルモデル化を行い、内部に放置されていた道具や家財も含めて全てのモノをカタログとしてまとめた「図2-3」。柱やトタンの壁材などの部材を詳細に観察すると、そこに残された傷や跡から少しずつ過去を想起することができる。

柱の横に付着した一筋の細い土の層や柱に空いた小さな穴からは、今はトタンによって覆われ空洞となった柱と柱の間にもともと土壁が存在していたことが推測できる。島を見渡せば同時代に建てられたと思われる多くの農具小屋はたしかに黄土色の土壁が目立ち、その推察に確証を持たせるだけでなく、その色からは佐木島の風土を構成している花崗岩由来の真砂土が利用されていることまで連想される。物流の限られた離島では、その場にある材料を用いて構築することが一般的だった。そこから続いて真砂土の物性について調べていくと、水捌けが良いという特徴が浮かび上がり、この農具小屋の根太が地面に直接置かれていたにも関わらず、腐ることなく床材が保たれている理由のひとつであると気づく。一方で島の郷土資料を開くと、その土壌の保水力の低さゆえに、島民は長年に渡り土砂流出に悩まされてきたと記録されている*1。その対策として1955年ころからは斜面地でのみかんの栽培が島全体で奨励され、安定した現金収入にもなったため、すぐに島内の農業生産の主要品目となった。逆にそれまでは芋、麦、除虫菊などが主に栽培されていたが、このような芋からみかんへの農業の大転換は、以下で触れるわれわれの農具小屋の小さな歴史にもまた呼応している。

農具小屋に残された道具を全て屋外へ搬出し、年代や種類ごとに並べ替えると、小さな建物の中にも非常に多様なモノが眠っていた。ごく最近の電動草刈り機や殺虫剤などの薬品から、素朴で原始的な木製の農耕具まで、それぞれが長い過去の営みの片鱗として残されていた。農具に限ってさらに調べると、最近の電動機具は草刈りや剪定などみかんの栽培に必要なものであるのに対し、木製の古いつるはしや平鍬などは芋の耕作に用いられるもの



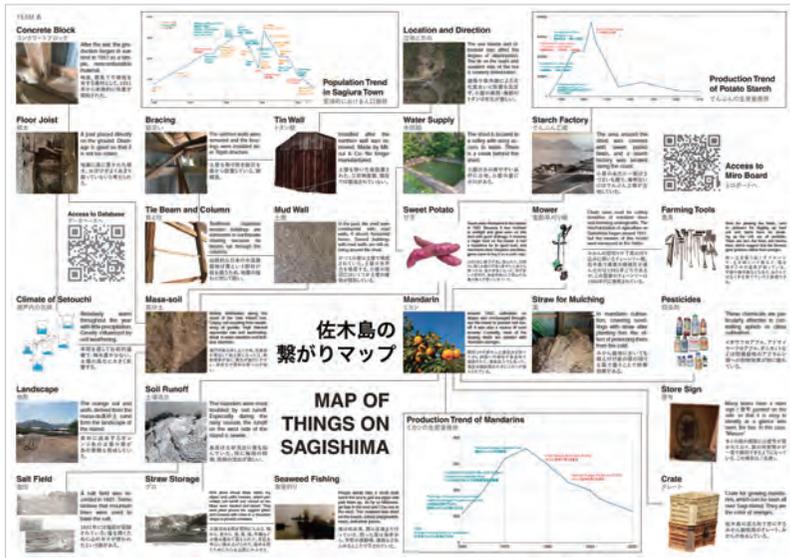
【図2】農具小屋の残置物の整理。全てのモノを外に出し、年代や用途ごとに分類した。

であった。つまり島の歴史と軌を一にするように、この一家が栽培していた作物の種類も過去のどこかのタイミングで芋からみかんへと転換が起きたと考えられる【図4】。

この推察を家主のご家族に伝えたところ、思い出されたように家業の澱粉工場の話へと繋がっていった。当時の澱粉は甘薯(さつまいも)から作



【図3】農具小屋の部材や道具を全てデータベース化。部分的な欠損などから履歴が判明することもある。(筆者作成)



【図4】佐木島の繋がりマップ。島の歴史や風土と農具小屋の記憶が相互に絡まり合っ、ひとつの「地図」が生まれた。(筆者作成)



〔図5〕かつての澱粉工場の写真。左端にある大きな建物が小学校を移築したとされる工場舎。右端にある白い小屋が曳家される前の農具小屋。
(出典：内海家所蔵資料より)



〔図6〕解体祭の準備。始まる前に島の宮司さんに現場へお越しいただき、安全祈願祭を執り行った。



〔図7〕垂木をパールで取り外す。大工の方に指導を受けながら、一本ずつ丁寧に下ろしていく。



〔図8〕壁のトタン材を剥がす。潮風に晒されて錆びついたトタンを欠損なく取り外すことは難しかった。



〔図9〕まとめた柱を布の上で転がし、数本の束にして包む。
26-28頁特記なき写真＝筆者撮影

られており、原料は島内の農家から買い取っていただけでなく、彼女の家族も小規模ながら甘薯栽培を行っていた。工場で製造された澱粉は船で本土へ運搬され、食品加工会社などへ販売されていた。最盛期には従業員を30名ほど抱え、工場も段階を追って拡張していった。ここでまた新たな記憶が呼び起こされるように、再び件の農具小屋へ焦点が戻る。1970年代の澱粉工場の拡張にもない、敷地の端にあった農具小屋は撤去を余儀なくされた。その際にただ解体するのではなく、数十メートル先の現在の位置まで、工場の従業員10名ほどで曳家を行ったという。現在では歴史的建造物や文化財の保存のために行われるイメージの強い「曳家」が、このような小規模で無名の小屋に対しても行われていたとはすぐには想像し難いが、その経緯を考慮すると事前調査で見つかった不自然なコンクリートブロックの基礎や土壁からトタン壁への改修などとも辻褄があう。さらにその話を聞いた彼女の祖父の記憶によると、三階建ての工場舎自体も実は廃校となった三原市の小学校を移築したものであった。かつての工場の写真からはたしかに木造校舎の面影を見ることができ、移築を実証する資料などは存在しないものの、限られた資源を有効活用するなかで途切れることなく紡がれてきたモノの流れを実感する「図5」。

モノや場所が触媒となり、建築に紐づいた記憶や愛着が連鎖的に掘り起こされていく。建築の消失とともに忘れ去られてしまったであろう過去

を、次へと引き継いでいく契機としての「終わり方」が解体祭である。それらの文脈を全て引き受けたいうえで、実際の解体が始まった。

丁寧に解体し、「終わり」をデザインする

建築の学生や島民、家主のご家族などを含めて総勢40名ほどが解体に参加した「図6」。協力していただいた大工の方の指導のもと、重機を使うことなくひとつひとつの部材を丁寧に手で取り外すように解体していった。瓦を一枚ずつ剥がしバケツリレーのように渡していくことから始まり、野地板、垂木、母屋と、建設時とちょうど逆順に外していく「図7」。用いる工具は原則パールのみで、材をできるだけ傷つけないように釘を外し、建物の脇に種類ごとにまとめて積み重ねた。壁のトタンも同様に剥がしてまとめていく「図8」。重機を用いて破碎するわけではないため、材の形状や状態を維持することができ、もう一度使えるような部材も多い。一日の作業を終えて残すは構造躯体のみとなり、二日目には早々に筋交を全て取り外し、柱と梁をまとめて引き倒した。ほんの一日前までは堂々と小屋が建っていた場所には、コンクリートブロックの基礎だけがその痕跡を残していた。もはや建物は物理的には存在しないが、ともに解体を行なった40人の手の内にはひとつひとつの部材の重さが新たな記憶の種として植えられたのではないだろうか。

解体祭は建物が敷地から消えて終わりではない。明るい甲いの場とし



【図10】柱の束を担いで海まで運ぶ。海へ送るために船が待つ浜辺へ、建物の重さを肩や腕に感じながら練り歩いた。(撮影=ブライアン・オルテガ・ウェルチ)

て、部材を手放す段階まで丁寧に「終わり方」をデザインした。釘を抜き、まとめて集められた柱や梁などの材を大きさに布でぐるぐると包み、担ぎ上げられるように紅白の縄で束ねた【図9】。これらの束のうち最大のものでは6本もの柱がひとつにまとめられ、5人の大人がようやく持ち上がるほどの重さ

となった。建物だったモノがバラされることで部材へと変容し、さらに束ねられることで祝祭性をもった象徴として扱われるようになる。参加者それぞれが柱の束を担ぎ、海に向かって練り歩いた。肩に食い込む柱の重

さは、それが支えていた建物の重さをそのまま担ぎ手の身体に実感させる。最終的に浜へ辿り着くと、待っていた船に柱を乗せ、参加者全員で海へと送り出した【図10】。柱は島の反対側にある木工所へと送られ、次に利用される日までそこで静かに待つことになる。こうして解体祭は幕を閉じ、建物の「終わり」として区切りがつけられる。

解体から生まれる価値

近年、一般人の手から離れてしまった建設行為を少しずつ開こうと、施工参加型の施工やDIYワークショップなどが広がりつつある。解体祭を同様の文脈で語るならば、ともにつくるのではなくともに壊すことで、建築の「終わり」に触れる機会をつくっているとも言えるだろう。解体業者に依頼をすると一瞬のうちに過去もろとも綺麗に消えてしまうような「解体」という行為に関わりしるを生み、手間と時間をかけてそのプロセスを顕在化させることで、より強い関係性へと再構築する試みかもしれない。

また近年の資源循環に関わる動向を見ると、解体が仮囲いの向こう側に隠されてしまったという話とは異なる文脈においても、「終わり」は抑

圧され排除され始めているように感じる。建築を物質の集合体として捉え、その循環を至上命題に置くような昨今の流れの中で、解体とはすなわち再利用という生産行為のはじまりの点である。分解するように取り外した柱や梁は、ひとつの木材として原材料のように扱われる。Buildings As Material Banks (BAMB) という用語が示すように、建築はあくまでも部材の仮の「貯蔵庫」であり材料や資源は常に社会を流動している、という視点からは「終わり」など存在しない*2。あらゆる人の営みが大きな自然の連続性の中に埋没していき、区切りは隠されていく。

あえて「終わり」を区切ることで過去に光があたり、対極に位置する「はじまり」という区切りもまた思い起こされる。言い換えればそれは物質以上のなにかを、人の営みや意志や繋がりの蓄積を、建築に見出す視点である。

壊されるべきときに、破壊する愉しみを感じ、浄化を喜び、衰退に対する補償を見つけ、損失や放棄と自由に取り引し、死を人生の一部とみなしてみてもどうだろうか？*3

ケヴィン・リンチが晩年に残したこの言葉は、一見すると破壊を肯定する厭世的な趣味にも聞こえる。しかしその本意はまさに、「終わり」を直視することから逃げるなという警告ではないか。生産に価値が置かれる社会において「終わらせること」は難しい。だからこそ、放置して忘れ去ったり、目を逸らして瞬く間に取り壊したりするのではなく、丁寧に「終わり」と向き合うこと自体に新たな価値を見出したい。

【注釈】

- *1/山下博巳「さきしまの歴史——双鷲洲」2015年
- *2/BAMBプロジェクトの公式サイト <https://www.bamb2020.at/about-bamb/>
- *3/ケヴィン・リンチ『廃棄の文化誌』工作舎、1994年、217頁

二瓶雄太(にへい・ゆうた)

2000年生まれ。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻権藤智之研究室修士課程2年。一般社団法人ASIBA代表理事。大学で建築の解体に関する研究を行いながら、アカデミアと社会の橋渡しを自論み、建築学生向けのインキキベーションプログラムなどを実施。専門は建築生産。

エントロピーとアーキテクチャー

山口純
 「武蔵野美術大学・東京都市大学 非常勤講師」

廃材の不確定性

産業廃棄物処理場に併設されたDIY工房でアルバイトをしていたことがある。解体現場から出る廃材は形が揃っておらず、釘やビスが残っている。稀に釘やビスが埋もれていることに気がつかず工具を当てて、刃をいためてしまうこともある。廃材には不確定性がつきものだ。

合理的に考えようとするのが、物事を上手にコントロールする方向に帰着する。廃棄物を上手くコントロールすることは大事だし必要なことだけれども、本稿では別の話もしたい。物質循環のあり方と、社会のあり方、そして心のあり方は相互に関連しあっている*1,2。この相互連関のなかでの廃棄に目を向けると、不確定性あるいはエントロピーについて考えることになる。

物活論

産業的なモノ作りは、モノを人間がコントロールするといふ、二元論的で人間中心主義的な見方にもとづいている。対象は、交換可能な手段である。手段として合理化するなら、廃材など使わず標準化された材料を使うべきだ。ところが、モノを作るときに、人間がモノに一方的に形を押し当てるのではなくて、モノの側から形が生まれる面がある。そこには、モノとの対話のような相互作用がある*3,4,5。この態度においては、廃材はその不確定性ゆえに、新材にくらべて魅力的な対話の相手になりうる。

モノとの対話という言い方は、モノに「エージェンシー」(動作主性)を認め

ている。今日のエコロジ的な危機のなか、主客の二元論を批判するポスト人間中心主義的な立場から、モノのエージェンシーが主張されるようになった*6。モノのエージェンシーの観念を遡ると、モノが生きているという「物活論」(Vitalism)という考え方を見出す。廃材でデザインする「スクラップ装飾社」*7、廃材再生の活動である「大見新村プロジェクト」*8、あるいは人間以外の存在とのダンスを試みるアーティスト・コレクティブの「Mapped to the Closest Address」との関わりのなかで「図1」、物活論的デザインについて考えてきた。

コントロールと対話を図2のように対比できるだろう。上図では客体

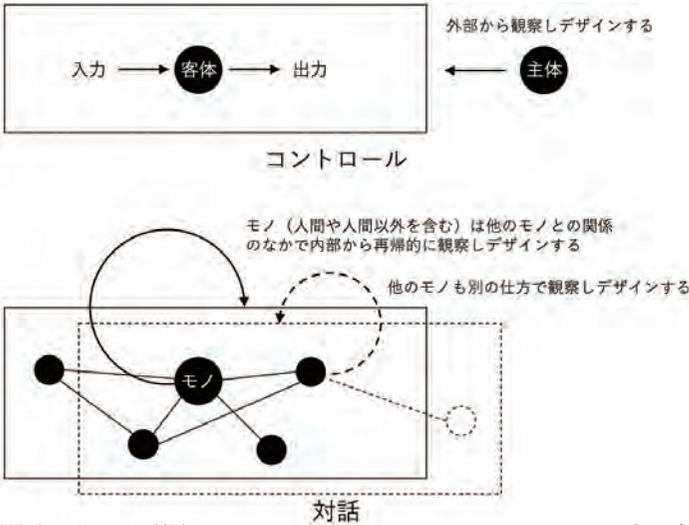


【図1】 Mapped to the Closest Address + 山口純「誤山を眺める」
 (大地の芸術祭/越後妻有アートトリエンナーレ2022)
 インスタレーションの一部には地域に自生する葛(くず)や滞在したゲストハウスの掃除で出てきた廃材を用いた

〔対象〕が外部に立つ主体の視点から観察されデザインされる。対象は入力にたいして出力を法的に返す。主体は法的性を知ること対象をコントロールする。下図では人間や人間以外のモノが内部から自分たちを再帰的に観察しデザインする。モノは他者との関係を通して自律性をもっており、別の仕方(図では点線で表している)で対話的に世界を観察している。モノたちは相互の観察の違いへの気づきを契機として視点を更新していく。

アナーキテクチャー

産業的なモノ作りは、モノと人間の二元論だけではなく、人間社会におけるヒエラルキー的な権力関係に基づいている。人間もまた交換可能な手



〔図2〕コントロールと対話



〔図3〕本町エスコラの様子
庭は菜園になっていて、ときおりマルシェイベントが行われる

段として規格化される。資本主義社会の競争の中で効率的に品質の高い商品を作るためにヒ

エラルキーが必要だ。しかしその品質とは誰にとつての価値だろうか。私には、人々が価値を強いられるのではなく、自分たちで価値について探究できることに、価値を置きたい。できるだけヒエラルキー的権力関係のない社会を目指すという意味ではアナーキストである。これは、ポスト資本主義的な社会を求めることにつながる。市場に全面的に依存することなしに生活できるための、互酬的な生活基盤としての「コモンズ」を生み出したい*9。廃棄物や不用品のローカルな循環も、市場への依存度合いを減らすのに役立つ。京都市の路地裏の空き家となっていた長屋をまとめて改修して自治的に運営する「本町エスコラ」〔図3〕に関わっているが、私としてはそのようなコモンズの再生を意図している*10。

資本主義の発達以前に、文明はヒエラルキー的権力関係に基づいているという考えもあろう。しかしグレイバーとウエングロウ*11が示すように、遊動と狩猟採集の時代を終えて定住し農業を開始すると必然的にヒエラルキーが生まれるというような通説は、考古学的証拠と一致しない。有史以前から人は社会構造に関する実験をたえず行なってきた。ヒエラルキーが見受けられない大規模集住地も存在した。

ヒエラルキーなしに協働し生活環境を作る技術を「アナーキテクチャー」(anarchitecture)と呼んで探究している。この造語はアーティストのゴードン・マッタークラークがグループや展覧会の名前に使ったものとして知られているが、ほかにもさまざまな人たちが各々で使っている*12。アナーキズムの運動の原理として、「予示的政治」(prefigurative politics)という考えがある。手段において目的が予め示されているべきだ

というものである。デザインと製造そして廃棄というプロセスの全ての要素が、手段としてのみではなく、それ自体として価値をもつことが望まれる*5。

モノを作る作業は権力関係の中で強制されるものでなければ、楽しいものになる。三重

県亀山市の空き家活用・関係人口創出のプロジェクトで講師を務めている。市の所有する廃屋を拠点として使用している。過去には工場として使われていたそうで、床下に鉄のブリー（機械の動力伝達部品）が埋め込まれていた。そのままだと足の踏み場もないから、床を均して三和土の土間にした。ワークショップにおいては、土を石灰と混ぜて叩くりズミカルな作業をダンス的に行った「図4」。

エントロピー

アナーキテクチャーのための論理を求めている。物事から不確定性を排除しコントロールしようとする欲求の根幹から考えたい。この欲求と廃棄はエントロピーの概念によってつながる。

エントロピーとは熱力学において生まれ情報学においても用いられる概念で、その大きさは不確定性、低さは秩序として解釈できる。孤立系のエントロピーは減らない（熱力学第二法則）。しかし開放系である生物は、環境から食糧など低エントロピーを取り入れる一方で排泄など高エントロピーを環境に廃棄することによって、自らの低エントロピーを維持する。



【図4】 亀山市空き家活用・関係人口創出トライアル「DOMA PROJECT」での三和土づくり
（図1~4=筆者提供）

植田*13が言うように、人間社会の物質循環もまた、低エントロピーの資源という入力と、高エントロピーの廃棄という出力に依拠している。したがって廃棄ゼロは不可能であるが、その廃棄が生態系にとっての資源となれば生態系は持続可能である。さらに廃棄物の投入による砂漠化対策*14など、人間の廃棄は生態系の安定性にも寄与できる。しかし今や過剰な廃棄が生態系のバランスを崩している。「自然の循環と社会の循環をつなぐ」*13ことが必要だ。そのつながりは予想外のものでもありうる。大山*14はサヘルの農耕民が生ゴミだけではなくビニールや金属など難分解性の廃棄物も肥やしとして畑に投入することに注目している。それらはシロアリの住処を提供することで土壌の再生に貢献していた。

必要多様性の法則

アナーキスト建築家ジョン・ターナーは、トップダウンの集合住宅の開発を批判し、居住者コミュニティによるボトムアップのデザインの優位性を主張した*15。そこで彼が参照するのが「必要多様性の法則」*17である。これは環境からの攪乱を受けるシステムが環境に適応するためには、環境からの攪乱の多様性より大きな多様性をシステムじたいが取りうる必要がある、というものである。したがってシステムが環境に適応するためには、環境からの攪乱の多様性を減らすか、システムの多様性を増やす必要がある*18。トップダウンの組織は、下位の多様性が減らされることで、上位にとってコントロールしやすい組織になるが、組織としての多様性も低くなるため環境に適応できない。環境への適応のためには、現場での自律的な自己組織化によって環境の多様性に対処し、それでも処理できない「剰余の多様性」を上位で対応するという方針が有効だ*19。多様性とはエントロピーと言い換えることができる。必要多様性の法則は、生物が低エントロピーを維持しようとすることと矛盾するように聞こえるが、これはエントロピーの補完的な両面である*20。

必要多様性の法則についての議論を読むなかで、それは一体誰にとつての多様なのかということが気になっていた。熱力学的なエントロピーは客観的な物理量である。他方で情報学的なエントロピーは主観確率(ヘイズ確率)にもとづくものでありうる。近年の神経科学で提案された「自由エネルギー原理」(free energy principle)によれば、生物は環境の観察の予測誤差を最小化するよう知覚し行動する*21。予測は世界についての内部のモデル(生成モデル)に依存する。エントロピーはモデルに相関的だ。短期的に予測誤差を最小化しようとすると、何もない部屋に引きこもるべきだということになる。生物はそうせず新奇性をもとめて探索を行う。これは環境からのエントロピーを短期的に上げることで長期的には下げているのだと説明される*22。学習によって生成モデルは更新される。そのためには探索が必要だ。

エントロピーを排除するのも求めるのも、両方とも生命に内在的な傾向であるようだ。対話とは、人やそれ以外のエージェントが環境からのエントロピーをもとめる探索的な学習を通して相互のモデルを更新するあり方である。アナキテクチャーにおいて人とモノの対話からポトムアップに形が創出される。マクロな視点からのコントロールは、あくまでそれを支援する。廃棄に関しても、人工物と生態系のローカルな循環の自律的な展開が優先されるべきだろう。その不確定性の高さは、後は野となれ山となれということではない。自らの視点が部分的であることを認識し、だからこそ応答しあうという意味での、「責任responsibility=応答可能性response-ability」*23が問われるのである。生ゴミはゴミ回収に出さずに堆肥にすることが出来る。そのためには生ゴミを分解する微生物の変化に応答し、ケアすることが求められる。またその応答を通して生ゴミと食べ物についての私たちの感覚が更新される。このような対話的関係の可能性を建材やその廃材の循環において探っていくきたい。

【参考文献】

- *1 / ガタリ・F「三つのエロジ」平凡社、1977年
- *2 / 山口純「建築設計のセカンドオーダー・サイバネティクス コントロールを諦める設計」、2020年
- *3 / 山口純「物活論的設計論の方向性」Designシンポジウム2016講演論文集
- *4 / 山口純「対話を通じた探究としての設計」Designシンポジウム2019講演論文集
- *5 / Yamaguchi, J.(2022) "Refigurative design for a post-anthropocentric and post-capitalist future", in Make do with new alternative trends in Japanese architecture, SAM Schweizerisches Architekturmuseum, Yuma Shinohara, Andreas Ruby (ed), Christoph Merian Verlag.
- *6 / ラトゥール・B「虚構の近代」新評論、2008年
- *7 / 山口純「モノとの対話」としての設計の理論と実践「物活論的設計論」と「やわらかい設計図」日本建築学会学術講演梗概集2018年、619〜622頁
- *8 / 山口純、松崎篤洋、本間智希、北雄介、川勝真二「フクシヨリサチとしての無住化集落再生活動におけるアクター・ネットワーク」京都市北部における無住化集落再生活動 その3、日本建築学会学術講演梗概集2015年、9〜10頁
- *9 / 山口純「DIYとギョウゴノミ」建築と社会、2019年、9月号
- *10 / シゲット・E、山森亮、堅田香緒里、山口純「お金のために働く必要がなかったら、あなたは何をしますか」光文社、2019年
- *11 / クレーバー・D、ウツタロウ・D「万物の黎明」河出出版、2022年
- *12 / Wiegler, M.(2018)「Cutting Matrix-Clark: The Architecture Investigation」, Lars Mueller.
- *13 / 植田敦「新石油文明論砂漠化と寒冷化で終わるのか」農文協、2004年
- *14 / 大山修「近藤史「サヘル」の乾燥地農耕における家庭「ミ」の投入とシロアリの分解活動」地球環境Vol.10、No.1、49〜57頁、2005年
- *15 / Turner, John, F. C. (1976) "Housing by People", Marion Boyars.
- *16 / 山口純「建築家シムン・F・C・ターナーの自律的住居システムの思想」日本建築学会近畿支部研究報告集、計画系(56)、181〜184頁、2016年
- *17 / Ashby, W. R. (1958) "Requisite variety and its implications for the control of complex systems", Cybernetica, 1:2, 83-99
- *18 / Beer, S. (1974) "Designing Freedom", House of Anansi Press(サー・S・宮沢光・関谷章(訳)「管理社会の自由」啓明選書、1998)
- *19 / Espjoo, R.(2000) "Giving requisite variety to strategic and implementation processes: Theory and practice", International Symposium on Knowledge and Systems Sciences: Challenges to Complexity, Ishikawa, Japan, Japan Advanced Institute of Science and Technology, 34-42
- *20 / Zwick, M.(1978) "Requisite Variety and the Second Law", Systems Science and Cybernetics Symposium.
- *21 / 山口純、柳澤秀吉、鈴木杏奈(2022)「自由エネルギー原理に基づく設計プロセスのモデルの構築に向けて」C・S・パースの探究の理論を媒介とした検討」Designシンポジウム2023講演論文集
- *22 / パー・T、ベッソロ・G、フリストン・C「能動的推論——心、脳、行動の自由エネルギー原理」ミネルヴァ書房、2022年
- *23 / Haraway, D. (2016) "Staying with the trouble, Making kin in the Chthulucene", Duke University Press.

山口純(やまぐち・じゅん)

デザインの実践と研究を行う。博士(工学)。博士論文「C・S・パースの記号論に基づく探究としての設計プロセスに関する研究」。武蔵野美術大学非常勤講師、東京都市大学非常勤講師。「主な共著」「お金のために働く必要がなかったら、あなたは何をしますか」(光文社、2018)

市場から棄てられた空き家・空き地の再生——神戸市長田区駒ヶ林地区の事例から

松原永季 「有限会社スタチオ・カタリスト」

震災後顕在化する地域の空き地・空き家

神戸市長田区駒ヶ林地区は、奈良・平安時代から大輪田泊の舟繋所である歴史的な地区である。面積は約19ヘクタール、人口は約2700人である。神戸市全域が壊滅した空襲も逃れ、阪神・淡路大震災でも火災被害がなかったため、昔からの漁村集落の特徴を今も残している（図1）。それは密集市街地という側面も持ち、2011（平成23）年に定められた神戸市の密集市街地再生方針では、まちづくりの優先度が最も高い「密集市街地再生優先地区」として位置付けられている。漁村集落特有の空間構成をもつがゆえに、狭



【図1】長田南部地区被災度別建物分布状況図
赤色破線内が駒ヶ林地区。赤色が全壊、オレンジ色が半壊を示す。
（出典：日本都市計画学会関西支部、日本建築学会近畿支部都市計画部会 阪神・淡路大震災被災実態緊急調査）

小敷地、未接道敷地、木造老朽家屋が多い。道路幅員は狭く、法上の位置付けのない非道路も多い。都心から地下鉄で15分ほどという利便性の高い立地にありながら、高齢化率は40%に近く、人口流出（50

年前の三分の一以下に減少）、産業空洞化が進行するなど、木造密集市街地の特徴を備えている。とくに土地家屋については、公図の地図混乱による敷地境界未確定、相続登記の不備、権利関係の複雑さ、所有者の所在不明などの課題が多く、一般の不動産市場には現れない物

件が多い。

震災による火災はなかったものの建物の被害はさまざまで、被災した建物とそうでない建物が各所で隣接して存在することとなった。そして震災後、早期に公費解体が実施されたため、被災建物があった敷地のほとんどが空き地化した。さらに敷地が課題をもつ場合においては、空き地のまま残される状況が多く見られた。結果として残った建物と空き地とが、モザイク状に入り組んで存在することとなったのである。これは駒ヶ林地区に限ったことではなく、ほかの密集市街地再生優先地区でも見られる状況である。これら空き地では管理不全により、雑草繁茂、虫害、ゴミの不法投棄の課題が生じる場合が多く、自治会などで問題とされるようになっていった。この状況は震災後30年近くを経た現在でも変わらない。市場から棄てられたと言つてよい状態が続いていた。そして、全国での傾向と同様、人口減少にとまない、2010年代から次第に空き家の存在が地区内でも課題として認識されるようになった。

各地区で広がる防災空地の取り組み

駒ヶ林では地区を構成する10カ町の自治会、婦人会、老人会が一体となり、阪神・淡路大震災以前からまちづくり協議会が設立され、震災後はとくに密集市街地の再生が主たるテーマになった。その最初の取り組みは、震災で被災した長屋を売却した後に生じた空き地の再生だった。震災後生じた空き地については神戸市も課題視しており、新たな仕組みが考案された。所有者と神戸市、地域団体などが三者協定を結び、防災広場として活用するものであ

る。所有者が神戸市に土地を無償貸与し、代わりに神戸市は固定資産税などを免除する。さらに神戸市は広場としての整備費を負担するが、維持管理は行わない。代わりに地域団体などが、日常的に憩いの場などでこの場所を活用すると同時に管理を行い、災害などの非常時には、延焼防止の機能を果たすとともに消防・救助活動などの拠点とする、という仕組みである。当初これは「スポット創生事業」と呼称したが、現在では「まちなか防災空地整備事業」という名称で、密集市街地改善の手法として改編されている「図2」。

ワークショップにより計画がまとめられ、整備後は古い地区の名称を冠して「ひがつしよやすらぎ広場」と命名された。この整備を契機として、同町では餅つき大会が毎年末に開催されるようになり、また防災訓練にも活用されるようになった「図3」。



〔図2〕まちなか防災空地整備事業の仕組み
(出典：神戸市ホームページ)



〔図3〕ひがつしよやすらぎ広場
整備前(上)と整備後(下)



〔図4〕二葉地蔵広場 オープニングの様子

定資産税が課せられており、それを自治会が立て替えるという実態が把握できていた。神戸市の柔軟な対応もあって、まちなか防災空地整備事業が適用されるようになった。計画・整備の過程には、後に触れるアーティストの参加もあり、災害時には掲示板にもなる巨大黒板を地面に備えた防災広場が整備された。オープニングの際にはアーティストのコーディネートで、地域の子どもたちが黒板の額縁に花々を描いた「図4」。

以後、まちなか防災空地の取り組みは各町からの要望を受け、可能なところから整備が進み、地区内で12箇所(うち1箇所は後に建物を再建)が整備された。後に触れる下町芸術祭では、これら防災広場をつなぐような展示の試みもなされるようになった。この制度の活用は神戸市内のほかの密集市街地でも進んでおり、合計で80箇所近くが整備されている。

アートを起点とした空き家・空き地再生の動き

このような空き地再生が進捗する一方、空き家再生の取り組みも始まるようになった。駒ヶ林と周辺地区のまちづくりにおいて転機となったのは「角野邸」の活用である。何度も空き家の被害を受け、空き家として置いておくことに悩まれた所有者が自治会長に相談し、そこから地域を担当する専門家として筆者が相談を受けることとなった。元々は富裕な網元の別邸で、以前からその価値と重要性が住民から指摘されていた。ちょうど同時期、NPO法人芸法が地域内にアートの活動拠点を設けることを希望していた。筆者と区役所職員の仲介により、所有者と芸法副理事長(当時)が面会し、芸法が「角野邸」をアートの活動拠点として活用することが2013(平成25)年に決まった。

さらに、別の空き家の所有者から、神戸市に相談が持ち込まれた。未接道、再建築不可で、地図混乱により境界の定められない敷地に建つ



【図5】 Atelier KOMA 改修工事の様子

いわゆる文化住宅についてである。この敷地条件では、一般の不動産市場では扱われず、塩漬けされたまま放置されるのが通常である。そこで検討の結果、筆者が個人として買い取り、再生を試みることとなった。神戸市の耐震診断・改修の補助を活用し、銀行の融資を受けて水回りなどの必要な改修を施し、入居者を募集した。幸い、コンテンツラリーダンスを中心とした芸術活動を推進するNPO法人 Dance Boxの代表者が入居することとなり、利回りは低いものの、空き家再生が不動産賃貸事業として成立する可能性が確認された。

また別の戸建賃貸物件について、所有者から神戸市に対して、活用に関する打診があった。これもまちづくり協議会・自治会での検討を経て、最終的には高校を卒業した知的障がいをもつ若者のためのアトリエ「Atelier KOMA」として活用されることとなった【図5】。

こうした経緯で、駒ヶ林地区に新たな入居者がさまざまに加わるようになった。芸法は1年間をかけて空き家を片付け活用できる状態とし、すぐにオープンングイベントを開催した。衰退した密集市街地に、アートの関心のある若者が数十名集った。それまでに地域で目にすることはなかったような若者たちである。頻繁に行われる交流会やイベントの開催により、定期的に地域を訪れる若者がさらに増えた。一方、Dance Boxは近隣の商店街に拠点を構え、ダンスの国内留学事業を開始した。毎年半年間、全国各地からダンスに関心のある若者が定住し、学ぶ。これら学生や、時には海外から訪れたダンサーが起居するようになった。Atelier KOMAには、毎週知的障がい児が集い、近隣の住民と交流をもつようになった。

空き家再生にともなう新たな入居者の参加により、地域の雰囲気は徐々に変化してきた。若者や外国人の姿を日常的に見かけるようになり、彼らが暮らしの中で関わる地域住民の意識の変化を促していった。最終的には、

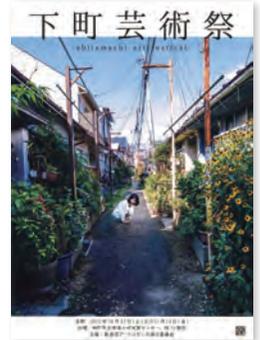
芸法とDance Boxが中心となり、地域の各種団体やキーパーソンを包含する実行委員会が組織され、2015(平成27)年に下町芸術祭が開催されるに至った【図6】。密集市街地の空き家や空き地、空き施設や既存店舗などを展示空間に見立てたこのアトリエイベントは、1か月間の開催期間に延べ7万人の来場者を集めることとなった。それまで地域住民や神戸市民が「新長田」「駒ヶ林」という地名にもついていたものとは別、新しいイメージが付与され若い世代に伝えられるようになった。下町芸術祭は、2年に1度のペースで継続開催されている。アーティストが密集市街地のまちづくり初期において、重要な役割を果たした事例は、大阪市の空堀地区や中崎町、東京の向島地区などで先例が見られるが、ここでも同様のことが起こったのであった。

密集市街地の創造的再生に向けて

こうした移住者の取り組みが進む一方、空き家問題は地域の課題としてより強く意識されるようになった。その実践的な対応に向け筆者とまちづくり協議会、神戸市担当職員とで、対応が検討された。そして駒ヶ林を含む周辺地区を対象に、空き家再生事業を担う法人の設立が模索され、最終的には筆者が所属する法人と神戸市職員OBなどが中心となり、一般社団法人空き緑ネットを設立した。その目的を「地の緑、人の縁をもとに、空き家・空き地の再生を継続的に支援すること」としている。地の縁とは、自治会などの地域団体を介した所有者などとの信頼関係であり、人の縁とは外部人材を介した入居希望者との信頼関係を示す。一般の不動産市場



【図7】一般社団法人空き緑ネット 案内チラシ



【図6】第1回下町芸術祭 パンフレットから

からは外れた空き家・空き地の再生には、関係者間の信頼関係が不可欠であるとの認識に基づいている「図7」。

法人設立後、各種情報発信や勉強会、空き家所有者と利用希望者との交流会などを開催し、具体的再生の可能性を探った。その結果、それぞれの所有者から相談を受けた空き家が、国の難民認定を受けたマレーシア経由のミャンマー難民家族の住居、DV被害を受けた女性のシェルター、世界を相手に抽象絵画を販売する画家のアトリエとして、再生されるに至った。この過程で気付かされたのは、密集市街地における縁を介した空き家再生は、住宅セーフティネットの有効な受け皿となる可能性がある、ということだった。居住に困難を抱えるいわゆる住宅確保要配慮者の方々には、一般的にはできるだけ家賃を低く抑えたい。そして孤立している場合が多い。また空き家の所有者は、市場からは外れているとの認識があるが故に、過大な家賃を求めている場合が多い。むしろ空き家が健全な形で維持できるならば固定資産税程度の収入で納得される。両者が信頼関係でつながれば、あとは改修などの再生の経費と借入金、家賃のバランスを整えることで、事業は成立する。入居者の孤立を支える仕組みづくりも可能だ。ただそのためには、地域に根ざしたNPO的性格をもつ仲介役の存在が不可欠ではある。

幸い、駒ヶ林を含む新長田南部地区では、同様の趣旨をもつ「おせっかい不動産」がある。ユニークなサービス付き高齢者向け住宅を運営する株式会社HAPPYの事業の一つで、地域に根差し、福祉も含め「暮らしを取り巻く環境まるごとアテンドする」ことを標榜している。また筆者の事務所OBの角野史和氏は社会福祉法人と連携し、いわゆるゴミ屋敷となっていた住宅の改善を果たした。所有者の相談に密接に対応し信頼関係を築いて、建物を解体撤去、生まれた空き地をサブリース形式による一般市民向けの貸し農園「おさんぼ畑」として再生した「図8」。そして同様の手法で、密集市街地の空き地の事業化を進めている。これら「地域に根ざしたNPO的性格をもつ仲

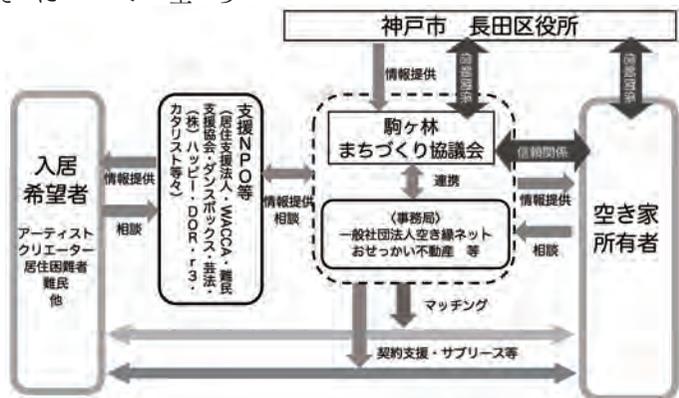


〔図8〕おさんぼ畑 整備前(上)と整備後(下)

介役」の存在があれば、市場から棄てられた空き家・空き地の再生は、ほかの地区でも可能ではないかと、筆者は考えている。

その実践に向け、駒ヶ林地区における、空き家・空き地再生のためのシステムを以下のようにまとめた「図9」。このようなシステムが継続的に存在できれば、課題地区とされる密集市街地は、社会的に弱い立場の方々や、これから社会に出ていこうとする若い人たちにとっての、ゆりかごのような存在として創造的に再生できるのではないかと、夢想している。それは棄てられた物件を中心とした、新しい不動産市場領域の形成を意味するのかもしれない。このシステムによる取り組みについて、まちづくり協議会会長の同意をすでに得ており、今年度から試験的に実施する予定である。

松原永季(まつばら えいき)
1966年 京都生れ。一級建築士。阪神・淡路大震災を契機に、住民主体のまちづくりを支援する活動を始め。2000年 studio CATALYSTを開設。2005年に有限会社スタヂオ・カタリスとして法人化。現在、建築設計とともに、密集市街地の再生、小規模集落の再生、市民と行政の協働景観形成等について住民の主体的活動を支援する立場から、取り組みを重ねている。2014年関西まちづくり賞、日本都市計画学会賞(計画設計賞)を受賞。



〔図9〕駒ヶ林地区 空き家・空き地再生システム

35~37頁特記なき図=筆者提供

「私のすまいろん」

茅葺き民家と草木の循環的利用

安藤邦廣

筑波大学 名誉教授

松の循環的利用

茅葺き民家を特色づける資材は、茅のほかには松である。京町家に代表されるように、町家は杉普請であるのに対して、民家すなわち農家は、構造材や板材に松が多用されている。戦国時代から江戸時代初期にかけて日本各地で民家は成立した。この時代、百年におよぶ戦乱の中で木材資源は枯渇し、二次林としての松林が日本全土に広がり、松が戦乱の復興の資材の主役となった。松は荒地にいち早く根を張り、成長が早いので、防風、防雪、防潮、防砂林として、集落や屋敷のまわり、また街道筋にも植えられ、人々の暮らしを守ってきた。建築用材としても、強度が高く、とくに曲げに強いので、民家の梁に使われた。松丸太を縦横に何段にも組んだ梁組は、民家の構造の要であり、大工の腕の見せ所となった。構造的には過剰とも思える太く立派な松梁を幾段にも重ねた梁組は、農家の暮らしを支えた松林の象徴であり、その家格を表すものとなった

た「図1」。

松を植えて松林を広めたのは、建築用材のためだけではない。油分が多く火力の強い松は、炊事や暖房の燃料として不可欠であった。さらに、松葉の腐葉土は肥料として田畑に施され、豊かな収穫をもたらした。松林は、成長すると適度な緑陰と腐葉土によって、土が肥えると広



【図1】江戸時代後期に建設された茅葺き民家の松で組んだ梁組
茅葺き屋根をおろして土壁を落とし、現代の住まいへと再利用される。使われている松梁は百本近くにおよぶ。百年以上過ぎても強度を保ち、膨大な炭素が貯留されている。(茨城県古河市) 38~41頁特記なき目=筆者提供

葉樹に遷移する。しかし、数十年に一度伐採更新することで、その遷移が抑えられ松林が持続する。このような松林の資源の持続的利用によって、国土の防災と環境保全がはかられ、江戸時代から明治大正昭和と長きに渡って人々の生活が安定したのである。

しかしながら、第二次世界大戦後の経済の高度成長のもと、エネルギー源は薪炭から石油へと転換がはかられ、農業の近代化によって化学肥料が普及する。農家の生活の基盤であった松林は無用のものとなり、放置された結果、松食い虫が蔓延し、松枯れによって松林は寒冷地や山間地域を除いて姿を消した。その多くは杉の人工林や広葉樹へと遷移した。

その一方で、屋根裏に残された松の梁組は、百年経った今でも雨漏りさえしなければ健在で、松の良材が入手できなくなった今日、古材として価値が評価され、再利用がはかられている。古材の再利用は、いわゆる民家再生にとどまらず、建築意匠の領域に新たな可能性を切り拓いている。

民家の屋根裏の梁組は、建築用材の貯蔵であったと同時に、膨大な炭素の貯留でもあった。その先人の知恵にあらためて驚かされる。これは、今日の脱炭素社会実現の観点からも重要な側面であり、民家の梁組に代表される古材の再利用を積極的に推進するためには、社会的、制度上の課題として取り組む必要がある。

茅の循環的利用

茅とは屋根を葺く草の総称、野山に生えるススキ、湿地、水辺に生えるヨシのほかにおぎ、シマガヤ、チガヤ、カリヤス、クマザサ、リュウキュウチ

クなどのイネ科の多年草、その地域の気候風土に応じて自生する多様な草を選んで使ってきた。そのほかに、小麦藁や稲藁などの穀物の殻も農業生産の副産物として大量に入手できることから、とくに食糧増産が進んだ戦中戦後においては多数を占めるようになり、この場合茅葺きというよりは、わら葺き屋根と呼ばれた。

これらの茅を採取する場所は茅場と呼ばれ、30坪程度の農家の屋根を葺くために必要な茅を得るためには、およそ1町歩(約1ha)の茅場が必要となる。茅葺き屋根は30年程度もつので、1町歩の茅場があれば、30軒の屋根が維持できることになる。農地や山林の面積から考えると、むしろ効率のよい土地利用であったといえる。ただし、この茅場で良質の茅を得るためには、その維持管理として、刈り取り後の火入れや夏の除草などの作業が必要で、これらを共同で行う相互扶助の制度も整っていた。その結果として、千年、二千年の長きに渡って、茅葺き屋根が持続してきたといえる。

これは、植物としての茅の旺盛な成長量と持続的な生産力を利用したものであるが、そのことは、屋根の建築資材として有用であったためだけではない。戦後、農業が近代化される以前においては、家畜の飼料はほぼこのイネ科の多年草であり、飼料のほかにも寝床の敷き草として大量に必要であった。屋根葺き材としては、茎がまっすぐで細くしなやかな材料が適材であるが、太くて葉の多いものは栄養分が高いので、むしろ飼料として好まれ、折れ曲がった茅や端材はすべて敷き草として無駄なく使い分けられてきた。農家にとっては、もつとも重要なものは田畑の肥料であり、化学肥料が普及する以前は、この茅の葺き替えの際に生ずる大量の古茅や、家畜の排泄物や敷き草の廃材が大切な肥料として、その全てが田畑に施され、豊かで持続的な有機農業の基盤となっていたのである。

したがって、農家にとって茅刈りは、屋根を維持するためだけではなく、家畜を養い、田畑を肥やし、豊かな収穫を得るために欠かせない作業であった。だからこそ、日本の農家の屋根は茅葺きでなければならなかったのである。

農家では、毎年茅を刈り、その茅で順繰りに屋根を葺き替える、その分だけ

古茅すなわち肥料が得られる、屋根は立派になる。茅が大量にとれば屋根は厚く葺かれ、それはすなわち肥料の蓄えであり、それだけ豊かな実りが約束される。こうして茅葺き屋根は農家の豊かさの象徴となった[図2・3]。

戦後、農業の近代化、すなわち農耕用の家畜が耕耘機に変わり、有機肥料にかわって化学肥料が普及したことによって、この農業における茅の有効性はなくなった。屋根だけのために茅を刈るのは不効率で、不経済であるため、また、農業と一体となった相互扶助のしくみも失われた結果、茅葺き屋根は急速に姿を消していった。そのことは、すなわち茅場、草原の消失を意味する。昭和戦前のころ、草原の国土に占める割合は、最大30%近くに及んでいた。今日、森林の面積は国土の65%を占めているが、昭和戦前のころまではそのうちの半分近くが草原であったことになる。人間の活動が停止すれば、日本列島はほぼ森林に還り、森林として持続する。国土の3分の1近くが草原で占めていたということは、草原に価値があり、森林ではなく草原を選んで草を資源として活用してきた生活や生業が持続してきた結果なのである。今日、草原の面積は国土の1~2%にまで激減している。これは草原の利用が途絶え、また拡大造林がすすめられた結果である。

森林のもつ、木材利用、炭素固定、水源の涵養、防災などの多面的な価値と同様に、草原についても森林に劣らないそれらの価値が近年注目されている。とくに、草原の消失による草原性の生物多様性の維持については、国



[図2] 厚く立派に葺かれた旧家の茅葺き屋根
軒厚で約90cm。軒に何層にも茅を葺き重ねて竹で補強し、軒を深く厚く葺いている。雨仕舞いや断熱性としては40~50cmもあれば機能的には十分である。それ以上の厚さは肥料の備蓄であり、農家の豊かさの表現である。(茨城県石岡市)



[図3] 茅の循環的利用
大きな合掌造りの屋根を6分割にして毎年順番に葺き替えていく。傷んだ古茅は肥料にまわし、さほどでないものは葺きなおして再利用される。傷む前に葺き替えることが、茅葺き屋根の維持管理の基本である。(富山県南砺市相倉)

際的な環境問題の重要課題として位置付けられ、急速に対策が求められ、草原の保全活動の契機となっている。

草を刈り取り、火入れを行い、その草の活用がともなうことによってはじめて、草原は維持される。そこで今あらためて、長く日本で営まれてきた茅の循環的利用すなわち屋根材や畜産と一体となった農業、あるいは農業生産の中に位置づいた茅葺き屋根が見直されている。

生物多様性の維持と並んで重要な国際的課題は、脱炭素社会の実現である。この点においても、茅葺きに使われるイネ科の多年草の炭素吸収能力は森林に劣らない。ススキやヨシは二酸化炭素を吸収して、年間に3m余りに成長する。それを刈り取ることによって、毎年持続的な再生産が約束される。刈った茅を屋根に葺けば、炭素が30年間貯留される。茅を大地に施すと、通気性、保水性が改善され、菌類や微生物の豊かな土壌となり、農作物の健全な成長の基盤となる土壌が持続する。化学肥料によって農地が劣化していくのに比べると、この有機土壌は持続可能な農業の基盤となる。

そもそも日本列島は世界有数の火山列島である。数百年に一度、火山の噴火によって国土は火山灰に覆われる。この火山灰には有益な物質も含まれているが、農業にとっては酸性土壌で不向きである。火山灰に覆われた大地にまず根を張るのが、ススキなどのイネ科の多年草である。酸性土壌に負けず、大きな根とその強い固着力で二酸化炭素を吸収し、急速に繁茂する。その遺骸が毎年積み重なり、土壌は次第に中性化し、有機土壌となる。つまり、イネ科の多年草は、大地を肥やしているのである。これを繰り返すことで、いわゆる黒ぼく土が形成され、真っ黒な色は炭素の膨大な蓄積量を表している。つまり、炭素の貯留から見ても、草原の持続とこのイネ科の多年草の蓄積による黒ぼく土の炭素貯留量は膨大なものである。

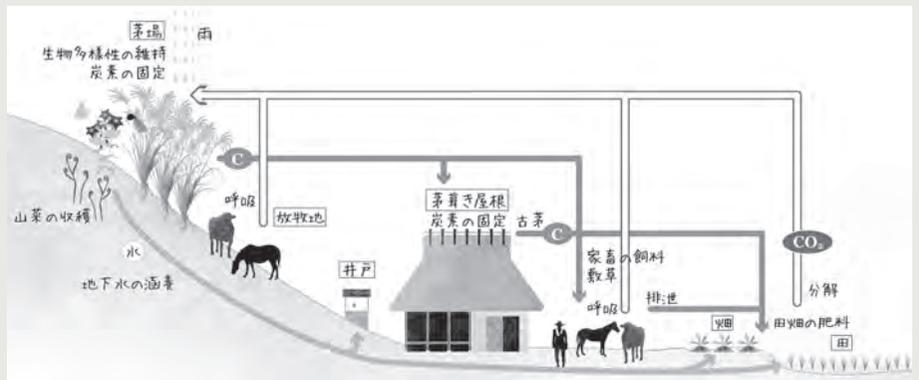
一方で、ススキと同様に荒野にまず生える樹木は松である。その松林の土壌は褐色土である。草原の黒ぼく土に比べると、炭素の貯留量は少ない。その分地上部の松の樹幹に炭素が蓄えられている。こうして茅場と松林は、炭素の貯留から見ると、二酸化炭素の吸収量はほぼ同等とすると、光合成され

た炭素は茅場においては土壌松林においては地上の木幹部に貯蔵されるという役割を果たし、その両者の相補的な関係が人の生活の営みの持続性に深く関わっている。森林と草原がほぼ同面積を占めていた江戸時代から昭和戦前までの日本の民家とその暮らしは、まさしく草木の循環的な利用によって達成されてきたのである。

人の営み、すなわち大地を耕して作物を得る、火を燃やして調理と暖房をする、そして家をつくる。これらすべてを草木の段階的、循環的な利用によって、持続的な暮らしを営んできた。その建築的な姿が茅葺き民家なのである〔図4〕。

災害復興に茅葺き民家は復活する

21世紀、日本列島は度重なる大地震と豪雨災害に見舞われている。荒廃した国土と生活の復興にあたって、茅葺き民家に見られる草木の持続的な生産力と回復力に寄り添った技と暮らしに着目できないだろうか。そして、茅葺き民家のもうひとつの特性、地域社会における相互扶助のしくみにも注目する必要がある。言うまでもなく、災害復興のボランティアは復旧復興に大きな役割を果たしている。今、忘れかけていた地域社会における相



〔図4〕茅場の多面的機能と炭素の循環
出典：『日本茅葺き紀行』安藤邦廣、上野弥智代 他（農山漁村文化協会、2019年）

互扶助のしくみが甦るまたとない機会といえる。

そこでいま茅葺き民家を新たに作ることはできるのか。ここでは、戦国時代の荒廃した国土の



〔図5〕屋根に断熱材として茅葺き屋根用の茅を充填木と草だけで仮設住宅の建築本体はつくられている。7年間の使用を終えた後に木材も茅も再利用された。



〔図6〕西日本豪雨災害で移築再利用された板倉の応急仮設住宅。2018年7月に発生した西日本豪雨災害において、ちょうど福島県で解体作業が始まっていた応急仮設住宅を、そっくりそのまま移築した。(2018年、岡山県総社市)



〔図7〕現代の茅葺き民家。屋根は金属板で葺かれているが、延焼のおそれのない部分の外壁は、茅葺き。外断熱材として優れた性能をもつ。外壁は北上川のヨシと周辺農家で生産された小麦藁。(宮城県石巻市)



〔図8〕断熱材として屋根に葺かれた茅葺きは内側にあらわしている。内壁の一部にも内側にあらわしとして、内部に柔らかな表情をつくる。調湿性や吸音性に優れた内部空間をつくっている。

中から茅葺き民家が誕生したことを思い起こす必要がある。多くの帰農した武士が、地域に帰り、木を植え、草を生やして茅葺き民家をつくった。

2011年の東日本大震災において、5万戸を超す応急仮設住宅が建設され、その中ではじめて木造で仮設住宅が実現した。これは地域に豊富にある森林資源を活用して、地域の人の力で行うことで、地域社会の再建に役立つ仮設住宅をつくり、それが地域のストックとなることを目指したものである。筆者らは板倉構法の仮設住宅を福島県に約200戸建設するこゝとができた〔図5〕。木材としては、戦後、松林や茅場にかわって拡大造林された樹齢50〜60年のスギを用いた。柱梁などの構造材のほかに、板倉構法としての壁、床、屋根外装、すべて杉材である。そして、屋根に断熱材として、茅を充填している。いわば現代の茅葺き民家のモデルといえる。

この板倉構法の特徴として、構造材は伝統的な継手仕口で組み、柱に厚板を落とし込んであるので、組み立て解体が自在で、再利用が容易である。仮設住宅として7年の使用期間を終えた後に、36戸が県内の復興公営住宅に改築再利用され、そのほか定住促進住宅などに20戸余りが移築再利用された。また、2018年に起きた西日本豪雨災害で、岡山県総社市の応急仮設住宅として、48戸がそっくりそのまま解体移築され、被災者を救った〔図6〕。さらにその仮設住宅としての使用を終えた後に、26戸はコンクリート基礎

につくりなおした上で、市営住宅として再々利用されている。

茅葺きの屋根は、防火の規制が厳しい都市部では一般的とはなり得ないが、断熱材として屋根裏に、あるいは壁や床にも施工が可能であり、効率的で性能のよい断熱材として技術開発が望める。天井や内壁の仕上げ材としても、柔らかな質感、吸音性にも優れた特性を生かしたデザインも試みられている〔図7・8〕。このように建築資材として利用し、解体された後も、農地に施されて大地を肥やすという循環を取り戻すことができれば、いわばこれは現代の茅葺き民家の復活なのである。

戦国時代から江戸時代に成立した草木の循環的利用は、500年を経た今、大震災を機に、持続可社会の実現に向けて生まれ変わる。

安藤邦廣(あんどう・くにひろ)

1948年、宮城県生まれ。工学博士、建築家。里山建築研究所主宰。一般社団法人日本茅葺き文化協会代表理事。一般社団法人日本板倉建築協会代表理事。
〔主な著書〕「東家造」(学芸出版社、2009)、「新版 茅葺きの民俗学——生活技術としての民家」(はる書房、2017) など。
〔主な共著〕「日本茅葺き紀行」(農山漁村文化協会、2019)、「小屋と倉」(建築資料研究社、2010)、「住まいの伝統技術」(共著、建築資料研究社、1995) など。
〔主な設計〕東日本大震災板倉の応急仮設住宅(2011)、AGRICAREGARDENかすみがうら(2019)、越後妻有大地の芸術祭「うぶすなの家」(2006)、鳴子こども園(2023)、その他板倉構法による住宅多数。

「ひろば」

ありふれた古い建物を活かす

西野雄一郎

「大阪公立大学大学院工学研究科講師」

いつのころからかだったか、どこにでもありそうな経年建物に興味を持ち始めた。一つの契機となったのは、卒業研究で大規模分譲マンションの住戸改修を調査し、修士研究で賃貸団地の住戸改修を調査した経験にある。住み手が自らの要求を改修によって実現した住空間からは人々の生き生きとした個性や創意工夫を感じ、心が躍ったのを覚えている。生活者の痕跡が標準化された空間に彩りを与える魅力に惹かれたのである。

本稿では、生活者の視点からありふれた「古い建物」を活かす取り組みを紹介させていただきたい。建物を活かす方法のひとつは、長く使い続けられるよう再生するものであり、建物利用者の手による改修＝DIYリノベーションを取り扱う。いまひとつは、解体される建物を別の形で継承・再利用する取り組みである。これらの具体的な取り組みを通して、ありふれた建物を活かすことの意味や可能性を考えたい。

住まいを活かすDIYリノベーションの遠隔支援

なぜDIYリノベーションを遠隔支援するのか

近年、芸能人がDIYで部屋を改装する様子がテレビ放送され、「大工の正やん」といった有名YouTuberが住宅の新築や改修の現場を映像配信するなど、住まいづくりに触れる機会が増えている。こうしたオープンな情報を利用して、専門知識のない人でも表層的な改修にとどまらず、建物性能を向上するリノベーションを実現できないだろうか？ と考え始めた。

ちょうどそのころに耐震化リノベーションの相談を受け、設計を行っていた住宅N邸がある。N邸は、大阪の住宅街に立つ築40年、木造2階建、延

べ面積149㎡の戸建住宅である。経年と地震や台風によって床の傾斜や雨漏りなどの劣化がみられるようになり、それを不安に思った所有者夫婦が賃貸に引っ越して、相談時点で5年ほど空き家になっていた。耐震診断の結果、上部構造評点が0.2（0.7未満で倒壊の可能性が高い）。所有者夫婦は、補強・修繕には多額の改修費用が必要になるため売却に気持ちが傾いていたが、親族からの売却反対の声を聞き、代々の土地建物を残したい思いもあった。空き家の活用方針を決定できず、空き家状態が長期化して将来的に放置されるパターンに陥りかけていたのである。

相談を受けて改修設計を進めている途中に新型コロナウイルス禍となり、先が見えないなかで改修工期を明確に設けなくてもよいこととなり、DIYによる大掛かりな耐震化リノベーションを行うことになった。実践の主体は、理想的には居住者が望ましかったが、所有者夫婦が高齢であったことから研究室が務めることとなった。そして実践の目的は、改修の低コスト化や工事技術の向上を目指して自宅をDIYで耐震化するリノベーションのモデルを開発することであった。

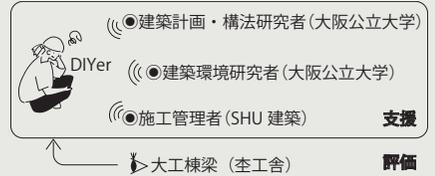
研究室メンバーのほとんどは、建築を学んでいるとはいえ改修工事の経験も技術もほとんどない未熟練者であり、YouTubeなどオープンな情報を駆使して可能な限り技術や知識を身に付けていった。しかし、未熟練者が必要となる耐震改修工事を行うとなると職人や技術者などプロの知恵と経験が必要になる場面も想定される。そこで、感染対策として三密（密閉、密集、密接）を避けつつも未熟練者とプロをつなぐ手法を検討し、遠隔支援を試みる方法に行き着いたのである【図1】。

遠隔支援の仕組みを検討する

遠隔支援の仕組みを計画する際に重視したことは、「未熟練者とプロの両者の意思疎通が的確かつ円滑にできること」、「プロは時間に縛られずに支援でき、本業に支障なく副業的な関わりもできること」である。そしてそれを実現するために用いたツールは、VRコンテンツ、点群データ、ビデオ通話、SNSである。まず、現地に来なくても現場の空間情報を読みやすいようにクラウドシステムMatterportを用いてVRコンテンツを作成し、プロが自由に視点を移動させながら空間を確認できるようにした。点群データは、専用のアプリの必要性などから、実用化には課題が多かった。そしてSNSによる支援は、未熟練者が作業日ごとに作業内容、感想や質問を「Acidbook」へ投稿し、プロ（施工管理者）が投稿を確認してコメントする方法であり、継続的・日常的な支援を担う実践の成否を左右するものであった。投稿項目は写真、ナンバー、タイトル、日付、メンバー、活動予定、活動内容、相談したいこと、感想、次回の予定である。施工管理者には、一つの投稿の確認とコメントにつき10000円の謝礼を支払うこととし、作業量と対価が見合うかを検証した。結果から述べると、未熟練者、プロともにビデオ通話、SNS、VRの組み合わせが使いやすい、専門的な知識がなくても始められる有効な仕組みであった。

実践 vol.1【LDK耐震化+水回り改修】遠隔支援の技術開発

プロの遠隔支援を得ながら研究室メンバーが少しずつ工事を進め、1年かけて耐震性能を向上させる大規模改修を行った【図2】。メンバーは「フラット35」対応木造住宅工事ハンドブックなどの書籍やYouTubeで施工の知識や技術を身に付けていったが、解体や施工の経験がほとんどなく、当初は「何が分からないかも分からない」状態であった。そのため、とくに解体や施工開始前後には、プロから安全上必須の作業工程や注意点を積極的



【図1】遠隔支援の仕組み

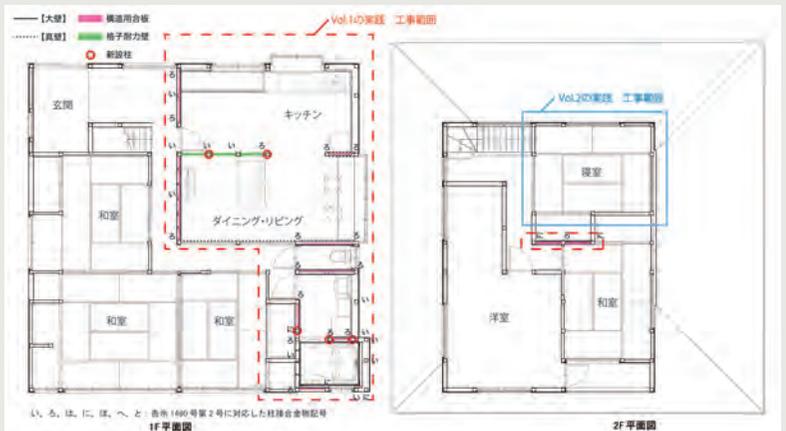
に伝えてもらうことで、安全に工事へのぞむことができ、工事への理解が深まることで以降の支援が円滑に進んだ。また、一旦工事ははじめると試行錯誤を繰り返す過程でさまざまな疑問や不明点が出てくるようになり、プロとのコミュニケーションを通して質問が増えていった。プロは、未熟練者の理解度や技術力をみながら、積極的・一方向的な支援から、答えではなく調べ方を伝えるといった支援へと移行し、未熟練者自身が検討する時間を確保して主体性を喚起することが重要であった。

SNSを介した遠隔支援は、未熟練者には作業日ごとの振り返りや次の予定検討といった日報になり、プロには自由な時間に確認・助言できるという点で、日常的な支援方法として有効であった。プロの相談回答は、文字で行うと多大な手間がかかることがわかり、ビデオ通話や電話で行うことでプロの負担低減と両者の円滑な意思疎通を図る有効な方法になった。

このような遠隔支援の結果、施工管理者



【図3】N邸竣工時の様子(2002年10月)



【図2】N邸実践 vol.1【LDK耐震化+水回り改修】平面図

や大工からは耐震補強、下地、仕上げなどの施工が適切に行われたと評価され、施主夫婦からは仕上がりの良さを称賛された【図3】。竣工から1年半が経過したが不具合は報告されておらず、ありがたいことに高齢夫婦が大切に住みこなしてくれている。また、研究室メンバーの施工への理解度・技術力は格段に高まり、大工になる者も現れた。

実践 vol.2【寝室の断熱改修】高齢夫婦によるDIYリノベーション

その後、vol.1に満足した施主から2階寝室の快適性を高めたいという相談があった。そこで、DIYを遠隔支援する実践の第二段として、DIY経験のほとんどない高齢夫婦が行う寝室改修を支援することになった。遠隔支援とDIYの様子を映像にまとめ、YouTubeで配信しているので視聴していただきたい*註1【図4】。遠隔支援の体制、進め方、ツール、対価の評価を行い、それに加えて未熟練者には求められるであろう対面でのワークショップや動画コンテンツ・テキストの最適な組み合わせを検討したが、その内容は結果を論文にまとめている*1。ここでは実践結果の記述に留まるが、遠隔支援によって70歳前後の夫婦が主体となって天井断熱改修と床不陸調整を実施することができ、寝室における酷暑の日平均温度が断熱未実施室よりもマイナス2.8℃になる効果を確認できた。



【図4】 遠隔支援とDIYの様子をYouTubeで配信

動産を継承する

古いモノに、新たな歴史を。動産屋toborowa

次は、建物が解体されることを受け止め、別の形で継承する取り組みである。学生時代、キャンパスのまわりにたくさんある長屋が日々壊されていく様子を残念に眺めていた。どうにか建物を残せないかと考えてもすぐには買えるわけではなく、自分でもなにかできないかと、2016年に仲間と

はじめたのが動産屋toborowaである【図5】。解体現場を見つけては廃棄される建材や家具などのさまざまな「動産」を少しでも救出し、再販することで、次の世代へつなげていこうと活動し、「古いモノに、新たな歴史を。」というメッセージとともに、オンラインショップを開設した。

その後は、メンバーが販売店舗をはじめ、マルシェに出店して端材をつかったワークショップを開催し、さまざまな活動を展開していった。この活動を通してモノを継承することの大切さと、そこに共感

してくれる人々との繋がりの豊かさを感じた。しかしそれと同時に、モノの回収、清掃、加工、販売といった過程には手間暇がかかり、保管倉庫の確保が課題であり、活動をビジネスとして成立させる難しさを痛感した。また、活動継続のためには古材・古家具などを入手する入口だけでなく、それらを活かした設計や施工を行うことで出口を用意する必要性も感じた。現在はメンバーのステージが変化し、toborowaは活動を休止している。

公共の資源・財産をあとに残し、つぎに繋ぐ。atofugiプロジェクト

ある日、動産屋toborowaの活動を見守ってくれていた知人から声を掛けていただき、公共の動産を継承する機会に恵まれた。全国で公共施設の統廃合が進められるなか、大阪府守口市では小学校の統廃合に際して使用可能な家具や什器の活用方法が模索されていたのである。家具や什器をリメイクしてほしいと依頼があって、廃校を見学した際、小学生のころの記憶が蘇り、「このまま残したい」と感じた。JIS規格によって椅子の脚の材料や太さなどがしっかりしており、一般に流通する子ども椅子とはちがったスケール感や色褪せ、刻まれたメッセージに可愛さや愛着を感じた。そこで考えたのが、モノの記憶を伝え活動に共感してもらえるような関係性の



【図5】 toborowa開設時メンバー (図1~6=筆者提供)

デザインに注力する方法である。「ato/tugi」というinstagramのサイト^{*註2}をつくり、動画や写真を用いて廃校の様子、モノの記憶、モノが日常で使われる様子を発信していった。そして守口市の社会実験「守口さんぽ(2022年10月15〜30日)」で出店し、動画を流しながら椅子や机などを展示するギャラリーのような店舗を構えた。また、堺市からも声を掛けていただき、蚤の市「エビスジマコテリビエール(2023年11月3〜5日)」に出店した。

お店には、机、椅子、棚、教材、ポर्टボールのゴール台^{*註3}などをさまざまに並べ、モノを介して子どもから高齢者まで世代を超えて会話を楽しんだ「図6」。小学校時代の思い出話、使っていた教材、ポर्टボールの発祥が堺だという力説、こんな風に使えないかなという相談など。公共の財産だからこそ、さまざまな境界を乗り越えてヒトとヒトを結びつけ、モノとヒトとの新たな関係を築く力強さを感じた。公共財産の出品は、社会実験の委員会が公共財産を無償で引き受け、販売し、社会実験への還元や社会貢献に活かしていく仕組みによって可能となった。しかし同様の取り組みを行うには仕組みの整理が必要なことも事実であり、多方面の理解が必要である。

建物を活かす社会

これまでの実践を経験し、ありふれた古い建物を改修や再利用によって活用することがもつ、人をつなぎ、育てる可能性がみえてきた。その可能性を引き出すためには、建物自体やそれを構成したモノが有するストーリーに目を向け、その価値を顕在化し、共感の輪を広げ、共感者がつながる場を用意していかなければならない。映像やデジタル技術はその鍵になりそうである。

改修については、減災やSDGsへの対応という社会的要請を背景に築古住宅の性能向上が求められるなかで、生活者がプロと協働



【図6】ato/tugi 出店時の様子

して自宅に手を加えることで建物性能や利便性の向上を達成しうる。プロによる遠隔支援は、仕組みをまだまだ検討しなければならないが、職人や建築士のストック活用分野における新たなビジネス領域を拓く可能性がある。リタイアした熟練職人が体力や居住地を気にせずに支援する、子育て中の若手職人が隙間時間に支援するなどさまざまな働き方が考えられ、立地、現場対応、体力、時間、指導といったこれまでの建築現場の働き方を転換しうる。また、離島や山間部など不利地域における建物再生にも弾みがつくのではないだろうか。大工の減少が喫緊の課題となり、改修工事の担い手の発見^{*註3}が進められるなかで、引退・高齢層も含めた建物所有者によるDIYの喚起というポトムアップ型の方向性もみえる。建物を活かす仕組みを構築していくことで、なにかおもしろい社会が待っていそうである。

【参考文献】

- *1/西野雄二郎、徳尾野徹、岸本嘉彦、石山央樹「協働型デザインビルドに向けたDIYリノベーションの遠隔支援」住総研究論文集・実践研究報告集、No.50、2023年版、309〜318頁、2024年3月
- *2/松村秀二「新、建築職人論 オープンなものづくりコミュニティ」学芸出版社、2023年3月
- *3/河野直、小坂知世、ブライアン・オルテガ・ウエルチ、河野桃子「リノベーション工事における第三の担い手の萌芽」住総研究論文集・実践研究報告集、No.50、2023年版、13〜24頁、2024年3月

【註】

- *1/YouTubeの動画URLを次に示す。
- *2/F寝室の天井断熱
調査：https://youtube.com/VHnolwR6E
計画・設計：https://youtube.com/Ht8d-IXE5M
解体・施工：https://youtube.com/pxJEdLNVg
- *2/F寝室の床不陸調整
調査・施工：https://youtube.com/dzEhdLML5II
- *2/ato/tugi.instagram：https://www.instagram.com/ato_tugi_official/
*3/ポर्टボールのゴール台
ポर्टボールは、バスケットボールに類似するスポーツで、大阪府堺市発祥。ゴール台の上に立つゴールマンがボールを受け取ると1点となる。

西野雄一郎(にしの・ゆういちろう)

大阪公立大学大学院工学研究科講師。
1985年大阪府生まれ。ゼネコンで建築設計に従事した後、福岡大学建築学科助教を経て現職。建築を使い続ける社会への転換を加速することを目指して研究や実践に取り組み。研究テーマは、リノベーション、DIY、ものづくり教育、プロセスマネジメントなど。2022年 日本建築学会奨励賞、2017年 日本建築家協会「ゴールテックニューアワード」優秀賞など受賞。

住総研だより

第22回住総研研究・実践選奨 及び奨励賞



[写真1] 研究・実践選奨表彰式

「第22回住総研研究・実践選奨及び奨励賞」の受賞論文6編が決定した。2024年6月28日(金)に表彰式・記念講演会が一般公開(オンライン)にて開催され、「選奨」には賞状、副賞10万円、「奨励賞」には、賞状、副賞5万円を贈呈。[写真]

*所属は論文掲載に同じ・敬称略

〔研究・実践選奨受賞〕4名

●「リノベーション工事における第三の担い手の萌芽」(研究・重点)

▽主査・河野直(合同会社つみき設計施工社共同代表)▽委員・小坂知世(合同

会社つみき設計施工社)・ブライアンオルテガウエルチ(ハーバードGSD研究員)・河野桃子(合同会社つみき設計施工社共同代表)

●「伝統構法木造建物の簡易耐震性能評価法の構築——重要伝統的建造物群保存地区内子町八日市護国を対象として——」(研究・重点)

▽主査・宮本慎宏(香川大学准教授)▽委員・釜床美也子(香川大学講師)

●「全盲児の校内生活を支援する音声式触察校舎模型の開発と全国提供」(実践・自由)

▽主査・須恵耕二(熊本大学技術専門職員)▽委員・茂村広(熊本県立盲学校教諭)・永松真奈美(佐賀県立盲学校教諭)・川口歩美(熊本大学)・田中龍人(熊本大学)

●「居住と生業の場としてのインフォーマル市街地にみる共生と棲み分けの原理——インド・ムンバイのダラヴィを事例に——」(研究・重点)

▽主査・小野悠(豊橋技術科学大学准教授)▽委員・志摩憲寿(東洋大学准教授)・前島彩子(明海大学准教授)・田村順子(明治大学特任教授)

●「研究・実践選奨奨励賞受賞」2名

●「支払意志額に基づく高性能住宅の

中古住宅価値推計モデルの開発——住まいの「住み継ぎシステム」構築に向けて——」(研究・重点)

▽主査・五十石俊祐(地独北海道立総合研究機構)▽委員・佐々木優二(同)・阿部佑平(同)

●「災害復興公営住宅団地の長期的活用と変化に関する分析」(研究・自由)

▽主査・越山健治(関西大学教授)▽委員・宮定章(和歌山信愛大学准教授)

第9回住総研博士論文賞

住関連分野における研究発展のため、若手研究者・実務家の育成及び支援を目的に、将来の「住生活向上」に役立つ優れた博士論文を表彰。2024年7月26日(金)に表彰式・記念講演会が一般公開(オンライン)で開催され、賞状、副賞10万円を贈呈。

*五十音順・敬称略

〔博士論文賞受賞〕2名

●足立壮太「三井三池炭鉱の社宅街変容に関する住宅地計画研究」(2022年3月東京大学大月敏雄教授指導)

●八木尚太郎「地震による内外装壁の損傷の評価に関する実大実験を通じた研究」(2023年3月東京大学清家剛教授指導)

2024年度研究・実践助成採択

応募総数80件のうち、4月の研究運営委員会にて25件を選考、5月の理事

会・評議員会で決定された。また、研究活動の開始にあたり、2024年6月28日(金)にキックオフミーティングを開催した。

*助成番号順・所属(申請時)・敬称略

〔研究〕●香月歩(東京工業大学)●川原伸朗(横浜市立大学大学院)●佐藤栄治(宇都宮大学)●槻橋修(神戸大学大学院)●西野雄一郎(大阪公立大学)●石川永子(横浜市立大学)●大塚順子(東京通信大学)●岡村祐(東京都立大学)●佐々木葉(早稲田大学)●Jobran Ahmad Fahmi(早稲田大学大学院)●田中正人(追手門学院大学)●寺田健人(早稲田大学大学院)●中島史郎(宇都宮大学)●初田香成(工学院大学)●松田雄二(東京大学)●松本直之(東北大学)●葉袋奈美子(日本女子大学)●山口秀文(神戸大学)●山名善之(東京理科大学)

〔実践〕●松下希和(芝浦工業大学)●籾谷祐介(富山大学)●吉田直子(横浜国立大学大学院)●渡邊大志(早稲田大学)●川島範久(明治大学)●友

2024年度出版助成採択

応募総数14件のうち、4月の研究運営委員会にて6件を選考、5月の理事会・評議員会で決定された。

*助成番号順・所属(申請時)・敬称略

●岡部明子(東京大学大学院)●貞包英

之(立教大学)●内田奈芳美(埼玉大学)
●吉江俊(早稲田大学)●小野悠(豊橋
技術科学大学)●鈴木孝男(新潟食料農
業大学)

なお、助成開始の1986年から
助成件数累計は133件、助成総額
は約1億869万円。

住総研 研究論文集・実践研究 報告集No.50 発行(電子版掲載)

2023年10月末提出の研究論文・
実践研究報告書37編について、住総
研HP・JSTAGEにて公開中。

住まい読本24

『住まいづくりのこれから 〇〇大工
NEO工務店 シン旦那』
住総研「住まい造りの将来像」研究
委員会「編」
蟹澤宏剛、河野直、権藤智之、佐々
木留美子、角倉英明、森田芳朗、そ
の他シンポジウム講演者「著」
8月20日発行
新建新聞社/2200円+税



2025年度研究・実践助成 募集

▽募集期間:2024年10月1日~
2025年1月31日(電子申請のみ)
▽採択数:研究・実践合わせて25件程度
▽助成金額:1件あたり上限150万円
*詳細は住総研HP参照

2025年度出版助成 募集

▽募集期間:2024年8月1日~
2025年1月31日
▽採択数:5件程度
▽助成金額:1件あたり上限80万円
*詳細は住総研HP参照

第10回住総研博士論文賞 募集

▽募集期間:2024年5月1日~
2024年9月30日(原則メール受付)
▽表彰数:1~5編程度
▽賞金:10万円
*詳細は住総研HP参照

第11回「住まい・まち学習」 教育実践研修会 報告

「住まい・まち学習」を教える先生や
関心のある方々を対象とした実践研
修会を2024年3月20日(水・祝
)に実施し、41名が参加。

住総研シンポジウム 報告

◎第62回住総研シンポジウム
【閉じたコミュニティから開かれた

ネイバーフッドへ】
日時:2024年7月8日(月)
場所:建築会館ホール(港区芝)及び
オンライン

住総研シンポジウム 予告

◎第63回住総研シンポジウム予告
【郊外住宅地で「なりわい」をつくる】
日時:2024年10月23日(水)
場所:東京ミッドタウン八重洲(中央
区八重洲)及びオンライン
▽主題解説:齊藤広子(横浜市立大学
教授)

▽講演:本家豊大(ニュータウン再生
コーディネーター他)・能作淳平(ノウ
サクジュンペイアーキテクト代表)・酒
谷粹将(関東学院大学准教授)・藤原
真名美(藤原酒谷設計事務所共同主催)
▽討論:矢吹剣一(横浜国立大学大学院准
教授)・松村淳(建築社会学者)・講演者
*詳細及び申込については住総研HP参照

◎第64回住総研シンポジウム予告
【超高層住宅の災害対応を考える】
日時:2024年11月26日(火)
場所:建築会館ホール(港区芝)及び
オンライン
▽主題解説:秋山哲一(東洋大学名誉
教授)
▽講演:久田嘉章(工学院大学教授)・
山口大助(東京都住宅政策本部民間住
宅部マンシヨン課長)・村田明子(新都市
ハウジング協会マンシヨンLCP分科会主
査)・清水建設技術研究所・久保井千勢
(みなとBOUSAIプログラム代表)・橋
本真一(日本マンシヨン学会マンシヨン大
規模改修工事技術開発研究委員会主査)
▽討論:近角真一(集工舎建築都市デ
ザイン研究所代表取締役)・永井香織
(日本大学教授)・高井宏之(名城大学
教授)・講演者
*詳細及び申込については住総研HP参照

住まいろんシンポジウム 予告

【すまいと儀礼のいま】
日時:2024年11月11日(月)
オンラインのみ
▽主題解説:権藤智之(東京大学大
院准教授)・すまいろん企画編集委員)
*講演者その他詳細は住総研HP参照

*「すまいろん」は年2回(2月・8月)発刊。定期購読については住総研HPをご覧ください。

廃棄・循環・再利用
消費社会から住宅と生活を取り戻す

松村淳（神戸学院大学人文学部講師）

2

023年11月時点での空き家の戸数が900万戸を超えたという。2018年の

前回調査から約50万戸増加している。これは大変なことだと思うが、こうしたマクロデータの数値を見ても、数字があまり大きくてピンとこない。しかし、自分が生活している限界を見渡せば、空き家の増加を体感レベルで認識することができる。筆者が住んでいる街は兵庫県の南東部、いわゆる阪神間と呼ばれる人口の多い地域であるが、この数年で空き家・空き店舗を目にする機会が増えた。とくに駅前商店街の空き店舗が目につくようになった。

筆者が生まれ育ったのは四国にある人口が1万5千人の小さな町である。1970年代〜80年代にあっては、そうした小さな町でも空き家を見かけた記憶がない。筆者が暮らしていたのは当時完成したばかりの県営団地であった。そこは500近い戸数を有している巨大な団地であったが、空き部屋が

あった記憶がない。もっとも1973年生まれた筆者はベビーブーム世代の親から生まれた第二次ベビーブーム世代であり、まだまだ日本は人口ボーナス期にあった。こうした背景が旺盛な住宅需要を支えたため、空き家など存在する余地がなかったのである。

それから半世紀が経ち、日本は急速に少子高齢社会となり人口減少が続いている。人口ボーナス期に大量に建てられた住宅は、住み継がれることも建て替えられることもなく放置されている。それが積もり積もって900万戸を超えたのである。

このような状況はリノベーション市場を活性化させる。新築物件価格の高騰もあり、以前はあまり積極的に選択されてこなかった中古住宅のリノベーションという選択肢が市民権を得てきている。こうした状況を追い風にして、若手を中心にリノベーションを主軸とした設計活動を行う建築家も増えてきた。彼らの多くはローカル志向で、自

分の住んでいる街を良くしたいという思いを持ちながら活動している者が多い。筆者はそうした建築家を「街場の建築家」と名付けている。

松

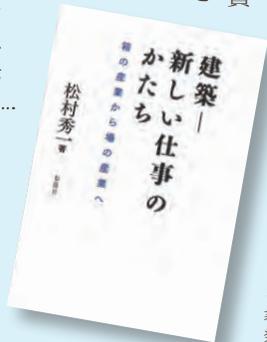
村秀一は2013年に『建築―新しい仕事のかたち―箱の産業から場の産業へ』を出版し、新しく建物をつくる

「箱の産業」としての仕事は減少し、これからは空き家を空間資源として捉えそれを活かしていく「場の産業」が台頭してくと述べ、建築産業の構造転換の必然性を論じた。今日

リ

ノベーションを主戦場とする若手の建築家の活動を身近に見ていくことは、

ゴミ（廃棄物）に対する眼差しの変化である。彼らは、廃棄物はたまたまある人にとって不要となった状態のモノで



『建築―新しい仕事のかたち―箱の産業から場の産業へ』
著者：松村秀一
発行：彰国社/2013年

叢書・ユニベルシタス 1090
『社会的なものを組み直す
—アクターネットワーク理論入門—』
著者：ブリュノ・ラトゥール
訳者：伊藤嘉高
発行：法政大学出版局/2019年



あり、別の人にとっては有用となる可能性が高いという認識を持っている。つまり社会から必要性をペンディングされている状態のモノであり、循環のサイクルから一時的に外れてしまっているだけであるという認識である。

それゆえ、廃棄物として焼却したり埋却したりすることは、循環のサイクルを断ち切ってしまう不合理なことであり、彼等にとって、そうした行為は容認しがたいものとして認識されている。彼等の態度は、世界の認識の仕方が少しずつ変化してきていることを示すものである。

こうした状況を読み解くのに大いにヒントを与えてくれる書物が社会学者ブリュノ・ラトゥール『社会的なものを組み直す—アクターネットワーク理論入門—』である。本書はアクターネットワーク理論(ANT)について論じている。当理論は社会を認識するための一つの的方法論である。この理論は伝統的な社会学の認識論の限界を乗り越えようとする試みでもある。伝統的な社会学における社会認識の方法には二通りあり、それぞれ方法論的個人主義と方法論的集団主義である。前者は、社会は個人への意思決定の総和であり、それ

以外の何物でもないとする立場である。つまり社会というものは実在しないという認識である。代表的な論者としてはマックス・ウェーバーが知られている。

それに対して、後者の考え方は、社会は単なる個人(の意思決定)の総和ではなく、それを超えた存在として実在しているという考え方である。社会(集団)には創発特性が生じており、それゆえ個人という要素には還元できないという立場である。社会学の祖の一人、エミール・デュルケムがこの立場の代表的な論者の一人である。デュルケムは個人の外にあって個人の行為を拘束する「社会的事実」の存在を唱え、その解明こそが社会学の研究対象であると論じている。

しかし、ラトゥールはこれらの認識論が社会という外部を設定していることに違和感を表明する。社会学者が社会や規範、権力、あるいは資本主義といった概念を用いるとき、すでにそれらは抽象的で漠然とした実在感を生じ



〔図1〕 廃屋建築家・西村組による8軒の廃屋群を利用した新しい村「バイソン」(神戸市、本誌すまいるンソングム p006-021 参照 撮影=筆者)

ており、それが事象を分析するとき「フレーム」として作用するため、対象の真の姿を明らかにできないのではなにかという懸念である。アクターネットワーク理論は、より客観的、科学的であろうとする。端的に言えばモノも人も社会を構成する「アクター」であり、社会は生成変化するそれらの無数の相互作用(エージェンシー)の織りなすネットワークとして認識される。それを分析するためには多種多様なアクターの存在を知らなければならない。

話

を廃材のリサイクルに積極的に取り組み建築家に戻そう。彼らは、空き家の解体によって生じる廃材をめぐる問題に正面から向き合うための具体的な取り組みをスタートさせている。その一つが建築廃材を利活用するストックヤードの立ち上げ



『現代社会の理論
—情報化・消費化社会の現在と未来』
著者：見田宗介
発行：岩波書店/1996年

である。日本では長野県諏訪市にある ReBuilding Center JAPAN(リビセン)がバイオニア的存在として知られているが、筆者の知人の建築家たちの実践もリビセンの活動に触発されたものである。ストックヤードが立ち上がることで、廃材が建材の一つとして認識されるようになり、流通し始めるのである。

ここで、リビセン的な状況が次々と生まれている背景を考えてみたい。その理解につながる書籍として、社会学者の見田宗介の著作『現代社会の理論——情報化・消費化社会の現在と未来』を紹介したい。見田は私たちが享受してきた「ゆたかな社会」が、実は歪な構造によって支えられており、それはいつか必ず破綻を迎える運命にあるということを示し、具体的な事例を豊富に示しながら易しい筆致で鮮やかに描ききっている。見田は世界で初めて量産化に成功した車であるT型フォードや、ココア・パフといった製品を事例に挙げながら、消費社会の成功要因を「需要の無限空間」を見出したことにも

ている。これは情報を媒介として欲望を自在に創出することで、「必要」がもたらす消費の有限性を打ち破るのである。「必要」という観

点から商品を鑑みれば、靴は一足あれば良いし服は季節に応じたものを着替えられる範囲で持っていれば十分である。しかし、われわれは必要を超えてモノを所有している。たとえば、筆者は同じメーカーの同じタイプのスニーカーを5足持っているが、それぞれ色が異なっている。カラーバリエーションという差異化のロジックによって別の商品となったスニーカーを購入してしまった結果である。高度消費社会の真つ只中に育った筆者などは、未だにメーカーが仕掛けてくるデザインの差異化の戦略にまんまと乗せられ、必要を超えた欲望を喚起され続けている。

1950〜60年代に住宅メーカーが設立され住宅産業が確立されると、住宅が商品と化していく。1959年に大和ハウス工業は「ミゼットハウス」を発表する。「ミゼットハウス」は庭先に建てられる勉強部屋を想定した六畳(10平方メートル)ほどの建物であった。ミゼットハウスにおいて特筆すべきところは、それがデパートで売られていたということである。大阪の大丸百貨店を皮切りに、全国27のデパートの家具売り場でカーペットや勉強机と一緒に売られていたのだ。布野修司は『住宅戦争——住まいの豊かさとは何か』の中で、日本の

住宅において1960年代がもつ意味は、住まいの在り方が「建てるものから買うものへ」と大きく変容したという意味で、歴史的な転換期として記憶されるだろうと述べている。

それ以来、住宅は消費社会の中に商品として位置づけられていく。商品となった住宅は差異化のために見栄えの良いキッチンやリビングを洗練させ、眺望や立地の利便性などが強調される。住宅は年収と相関する商品となり、住宅メーカーは年収に応じたさまざまなタイプの住宅をラインナップしている。

商品としての住宅は未だに多くの人が欲しがるものである。しかし、その一方で、商品としてブラッシュアップされていく住宅に違和感を覚える者も少なくない。筆者の現在の家は築20年の分譲マンションであるが、マンションこそ最も洗練された商品化住宅である。実家のマンションは、重厚な扉をくぐると吹き抜けにシャンデリアが吊られたエントランスがある。コンシェルジュがいる受付があり、ホールにはソファとテーブルが置か



『住宅戦争——住まいの豊かさとは何か』
著者：布野修司
発行：彰国社/1989年

れている。しかしそうした豪華設備の恩恵にあずかることができる住民は少ない。地方都市ゆえ、ほぼ全ての住民は自動車ユーザーである。駐車場はエントランスとは真逆の裏側に設置されているため、多くの住民は「裏口」から出入りしている。メインエントランスから出入りする機会は皆無に近いのだ。ユーザーの生活実践から乖離した部分が肥大化し、商品としての値打ちを上げるための要素となっているのである。

建

てるものから買うものになった住宅であるが、再び建てるものへと還ることはできるのだろうか。多木浩二は「生きた家——経験と象徴」のなかで、現代を「住むことと建てること」の一致が欠けた時代である」と喝破する（多木「19976」2001）。その理由は二つある。一つはすでにみたように、住宅の商品化の流れの中で、「建てること」が消費社会の中に取り込まれ、住まい手がそこに関与できなくなったからである。

もう一つは共同体の弱体化、解体である。多木は農村を走る列車の車窓から見た民家を眺めつつ「いわゆる民家はまもなく消えてしまおうだろう。民家がなりたつ条件そのものが社会から消失しているのだ。」（多木「1976」

2001）と述べている。茅葺き屋根は茅という自然の材料を使っているのでメンテナンスが不可欠である。しかも15年程度と比較的短いスパンで屋根の葺き替えを行わなければならない。かつて茅葺き屋根の葺き替えは、「結」と呼ばれる地域共同体の総出の仕事であった。それゆえ、茅葺き屋根の織りなす農村の景観は、そうした共同体が存在する証でもあった。

筆者が学生との課外活動で頻繁に訪れる神戸市北区は日本でも有数の茅葺き屋根の農家が残されている地域であるが、それらの大半は屋根部分がトタンですっぽりと覆われてしまっている。稀にトタンに覆われていない茅葺き屋根の民家があるが、それらは多木の言うように文化財や農家レストランなどの商業施設である。地域の祭りの維持も難しくなってきた状況にあっては、茅葺き屋根を地域の人々総出で葺き替えるなど、到底不可能である。土と木と草という自然素材を使って建てられた

家は、役目を終えたとやがて崩壊し土に還る。茅葺き屋根の民家は生きるとこと、建てること、住むことが同一の平面上で繰り広げられてきた時代をシンボリックに示す存在であった。

空

家を活かすことや、廃棄物を有効活用したリノベーションを実施する、といった諸実践は、生きること、建てること、住むことを再び同一平面に集結させる契機になるだろう。

しかし、現代に生きるわれわれが失ってしまった「住む力」を取り戻すことは容易ではない。「街場の建築家」たちの中には施工に市民を参加させるイベントを実施している者や、DIY体験会を主催する者も現れている。彼らの草の根の実践は、市民が少しずつでも「住む力」を身に着けていくための契機になるはずである。

松村淳 まつむら・じゅん

神戸学院大学人文学部 講師。香川県出身。関西学院大学社会学部・京都芸術大学芸術学部建築デザインコース卒業。関西学院大学大学院博士後期課程単位取得退学。博士（社会学）。専攻は地域社会学・建築社会学。

【主な著書】「建築家として生きる——職業としての建築家の社会学」（見洋書房、2021）、「建築家の解体」（筑摩書房、2022）、「愛されるコモンズをつくる——街場の建築家たちの挑戦」（見洋書房、2023）。



『生きられた家——経験と象徴』

著者：多木浩二
発行：岩波書店/2001年

「すまい再発見」

旧川合健二郎コルゲートハウス活用計画を通して これからの住居の在り方を考える

富田円「株式会社FOOD FOREST」

自然環境に順応した理想の住居を
求めて——活用計画の背景

この地域も今後、社会構造や地域環境の変化によって、重工業としての地盤が衰退していく可能性も考えられる。しかし現状において地域住民は、幸か不幸かそのことを実感することなく生活をしている。

いま、自然と共生する暮らしの需要が高まっている。とくにコロナウイルス禍以降に、生活形態の変化が起きた。都会では二拠点生活に憧れをもった若者が、働くことと住むこととの分離可能な仕事へとシフトし、自分に合った暮らしを求めて移動しはじめている。社会課題が変わろうとしている今こそ、誰もが理想の住居を探求できる機会を求めているのではないだろうか。



【図1】 楕円の筒がボンと置いてあるが故に数々の災害にも保たれた

「旧川合健二郎 コルゲートハウス」は、トンネルや地下鉄などに使われるコルゲートパイプを使った住宅建築で、1966年に竣工した。かつて建築

家・丹下健三とともに数々の国家プロジェクトで設備設計を担当した川合健二（1913～1996）が自らセルフビルドで建設した自邸である。川合は、

自分が亡くなった後に、建築物が莫大な解体費用やゴミが発生する、負の遺産となることを恐れていた。

彼の死後、この住宅が朽ちてなくなる前に再生したいという地域やステークホルダーたちの想いに背中を押されるようにして建物の保存が決まり、この住居の新たな活用方法が求められることとなった。しかし、建築遺産としてしか魅力を伝える以外に術がなく、開発資金の調達がみえない状態だった。

片付けからはじまる地域コミュニティ

ティ

保存が決まったあと、地域の協力を仰ぎ、各種専門家や関係者を募って、遺物でいっぱいになった住まいの大掃除と片付けを行った。およそ6か月の作業を経て、 unnecessary 家財やカタログ、雑誌、使われなくなった設備器具などの内容物を取り除いたことで、やっと建物の空間的要素を紐解けるような状態になった。筆者はこれらの全ての作業に参加し、そこから次なる活用へのイメージを膨らませていった。

綺麗に拭いた窓から光が室内に差し込み、感謝の手紙や写真、足元に育つ野草や果物などを目にしながら、この家族がここで過ごしていた瞬間は、きっと「楽しく、不思議で、面白く、美しい」要素があったにちがいないと思えた。だからこそ、今でもここに人が集い、魅了されているのではないだろうか。

そのことは、この最小限の空間内部と外部の双方において、暮らしに愛で



【図2】貴重な竣工当時の家族の生活風景に思いを馳せる

る対象を作っていたことにほかならないと感じた。そこで、効率性を極めたこの家で現代人が滞在する体験を経て、「暮らしの思想に浸りながら学ぶ」という次なる活用への糸口が見えた。

経済的価値ではなく、

文化的・地域価値の模索へ

建

築界限においてコルゲートハウスは、翻訳者が必要ならアートピースのように扱われていることがわかった。彼が生きてきた軌跡や感性をアートと紐付けるとなおのこと、ますます経済価値との関係が遠のいた。曖昧で捉えにくい事象に関わることで自体に障壁があるような現代において、この建物が受け入れられているということは、寛容的な土壌という潜在邸な地域価値が見出せるのではないだろうか。

そこで、文化的価値という尺度で価値指標を設定し、潜在的な地域価値の顕在化を図り、「コルゲートがあつてよかった」と思えるような地域の未来が訪れるという妄想を膨らませて、活用方法の模索に取り組んだ。そして、このエリアに

受け入れられたという軌跡を紐解き、さらに地域性と紐づけて周知させることで、地域社会の精神的な拠り所としてのランドマークになることを目指した。

不透明な社会や未来に対し、いま、多くの人々がまさに「閉塞感」を感じている。「閉塞感」とは、自らを取り巻く状況を何とか打開しようと試みるもの、その状況を打開できずもがき苦しんでいる状態、先行きの見えない状態である。誰もが自分自身を貫き通すことを恐れ、忖度された社会とのギャップを感じながら生きている。

輝いてみえる誰かのようではなく、在りたい自分、好きなものを好きと言えるような自分自身の価値観で、自分の住まいを表現したいという思いを表現していく。思慮深く考え抜いた結果がこのような独自性のある家を産むと

したらどうだろうか。

いま、息苦しさを感じている人に求められていることは、川合のようにその渦のなかから離れて、俯瞰して現状を観察できる体験を提供することではないだろうか。

彼の言葉に発想を得たこの体験のキャッチコピーは「二晩、地球と縁を切ってみる」だった。

国

内外を行き来する観光側の需要を考えながらコンセプトを整えた。しかし、持続性を考えれば考えるほど、地域の変革が鈍感なことに焦燥感と危機感を募らせていた。

そのころ、人口や経済をはじめ、さまざまな規模が縮小していくダウンサイジングの時代における課題解決のノウハウを提供するデザインファーム ADDReC(アドレック)と出会った。

ADDReC社は、ありたき(こうあってほしい)未来を想像したうえで、経済構造や社会の仕組みなどを含めてデザインしていくアプローチで、大規模な街づくりから公共空間、住居など、建築のサイズに合わせた課題解決方法を多数のプロジェクトとして展開している。筆者も地域共創アドバイザーと

して参画する、ダムができるまちのプロジェクト、そのひとつである。

私たちは、人口減少と高齢化が進む同地区で新たな価値を生み出そうと、国定公園である森の活用や不動産価値のない場所で起こす新興産業の創出に向けた価値創造を共同で手がけることになった。

ダウンサイジングのメソッドである「サステナビリテイ」や「自然共生と地域コミュニティ」といったテーマが共振していることもあり、リデザインして生まれ変わった「CORRUGATED HOUSE」(宿泊施設としての現在の施設名称)は、旅の新価値を想像する新規事業会社としてFOOD FOREST社が、インバウンド需要を含む流入人口の創生や人の動線までデザインする受け口として施設を運営していく。そこに、エム・プロダクツ社が地域性との接続を守る監修を行い、全体統合のプロジェクトデザインはADDReC社で担当することとなった。

川合健二の思想を受け継いだ住体 建築思想に浸りながら学ぶ

川合設計したコルゲートハウスは、稼働コストの掛かる設備も最小限で、採光も



【図3】間接照明が異空間を演出する夜のダイニング

在の都市生活や住空間は「光が飽和した、明るすぎる空間」ではないか、という問いが生まれた。

しばし日常から離れた環境で過ごしたいと考える人々が、明るすぎた現代のすまいとは違う暗さに気づき、そして暗がりの価値を知ってもらうことで体験価値へと繋がる可能性があると考えた。

扉

を開けた瞬間に、薄い楕円の空間に不便さを覚えるかも知れない。しかし、発光する幕照明のなかで眼が徐々に慣れてくると、この楕円の内部空間のダイナミックさと包容力、そして普通の建築では感じることが難しい繊細なディテールに気付く。

「本を読む」「食事を楽しむ」というようなことに必要な光は、さまざまな場所にある照明がその都度照らしてくれる。必要な部分では充電できる手持ちのランタンを持ち歩き、必要がなくな

なったら消灯する。これにより、コルゲートハウスの空間の独特な薄暗さを心地良く感じることができ、不思議と落ち着く空間を光環境の体験の設計により実現している。

エリア全体の文化的価値向上を目指して

建

築的視点は他の専門家が多くのいるなかでの論議は控え、受け継ぐ者としての現状をお伝えする。

施設のオープン以降、少しだけでも見せて欲しいといった見学の問い合わせ頻度は多いが、突然当日キャンセルされることもある。写真を撮るだけの視覚的情報は今やWEB上の二次情報と変わらず、大半が腕の良いカメラマンが撮影した写真を掲載した雑誌などを見て、答え合わせのために訪れているように感じる。見るだけの行為では先述の建物以外の付加価値という部分が浪費され、付加価値を作り続けていく活動も無駄にされていく。

「作る時は誰も手伝ってくれなかった」と川合が言い残したように、個に重きをおき自分軸でいいと思う部分を深掘りすぎると、協力体制を得にくいことも事実である。



【図4】散策しながら里山を表現したランドスケープを楽しむ

しかし、今ではコルゲートハウスがエリアに定着し、東海エリアでは6棟のコルゲートが現存する。それは、思想に触発された地域の人たちが家を持つならコルゲートでつくりたいと衝動的に突き動かされたことで伝承者が増えムーブメント化し、彼が知財を惜しみにくく提供し与える側になって初めて同じ志の仲間が増えたからではないか。

今回の再生でも、数々のプロジェクトメンバーによって、有志で外構や家具、空間に使われる建材、照明器具のリユースを積極的に行った。もともと川合が所有していた家具照明に名作が多かったこともあり、それらは綺麗に

北側からのみなど、一般的な、快適な建物とは大きく異なる。この建築物の特殊性は同地を訪れた建築家が「これは建築ではなく、住まえる装置」と評する。

「万人にとって快適な空間ではなく、川合の選択を感じ、意図的に世の中にある、当たり前が削ぎ落とされたことで改めて自分に合う／合わないの何かを考えられる場所」とした時、現

掃除して電球を入れ替え、室内のしかるべき場所に再利用された。また、家に残っていた茶碗をはじめ食器などもアップサイクルし、壁照明をリデザインするなどをした。

最

小限に安価かつ簡素に再生することもできたが、細部にまでこだわり、作者の哲学をくまなく表現しようと思った。

それは、建物に残された力強さが、各デザイナーやアーティストのクリエイティビティを今も刺激し続けていることや、そのことでさまざまな協力者が増え、エリア全体の魅力に繋がる現在の糸口を見い出せたからである。

川合の哲学を、この空間を体験する



〔図5〕 外部から見た夜の景色

ゲストたちに伝えることで、その先にこのエリアの活性に遠からず繋がっていくという未来を描き、その使命感をもってこの活動に取り組んでいる。興味のある方には、是非ともイベントとともに企画し、この建物を残すための原動力になっていただけるとありがたい。

名建築シェアリングによる価値共創の仕組みへ

今、誰もが家を所有することが必然ではない社会が訪れている。都市部における住宅は投資を回収できず、時間にも空間にも余白がない。忙しい毎日に友人を招き入れる広い庭の日々のメンテナンスをする時間を確保することも難しい。

すでに海外の都市部にはシェアリングの概念が定着し、保有することの意味が変容しており、空き家で稼ぐという投資としての考え方が一般的になっている。しかし、宗教観も異なり、他国とはグローバル化への速度も違うこの日本ではどうだろうか。

この名建築を通じて、価値が廃れず、むしろ蓄積していくためには、どのように保存・活用を行うべきなのだろうか。



〔図6〕 川合氏が残した四季折々の果樹から抽出するフレグランスの制作も(図1~6=筆者提供)

この事例を一つの検討材料として、「名建築」をシェアすることで、ともに育てる価値を共創関係で保っていくことができるとしたら、すばらしいことではないか。

観

光を通して、歴史や環境を感じながら新たな価値を創造し、さまざまな課題を抱えた日本の地域価値を相対的に底上げできる可能性を感じている。

「CORRUGATED HOUSE」プロジェクトは、人口減少が進む社会のなかで必然的に起こってくる「遊休

地活用」や「日本における空き家の活性化」といった問題へのアプローチのひとつで、川合の建築の哲学を知り、一緒にこの場の価値を育てていく仲間を募集していくような活動を展開している。名建築をもとに、鉄の再生・バ

リユースチェーンの再構築に挑戦したい方々とさまざまな社会課題に挑戦していくなど、スタートアップ企業が合宿で使用するプランもある。

コ

ルゲートハウス自体の宿泊は最大5名までだが、ファームハウスとしてシェアキッチンのある古民家も併設している。コルゲートハウスは、企業合宿などで利用のほか、今後は建築関係者に対する体験コースなど、さまざまなシーンに利用できるようなプランも拡大中である。

富田円(とみた・まどか)

建築を京都で学び、イタリアで空間デザイン会社にて従事した後、TRUNK(HOTEL)の立ち上げメンバーとしてホテル開発者として都市居住のあり方と旅の付加価値創出を作り出す事業開発の経験を積む。現在はコルゲートハウスを運営する株式会社FOOD FOREST代表としてインバンド領域の富裕層旅行の企画開発を行いながら、デザインファームADDDRECにてコンセプトアーキテクトとして参画する。

編集委員

委員長

大月敏雄

〔東京大学教授〕

委員五十首順

響庭伸

〔東京都立大学教授〕

権藤智之

〔東京大学准教授〕

柴田建

〔大分大学准教授〕

中嶋節子

〔京都大学教授〕

前田昌弘

〔京都大学准教授〕

編集・制作

帳章子・宮岡睦子

〔STE〕

印刷・製本

新藤慶昌堂

表紙デザイン

佐藤ちひろ

〔編集後記〕

●昨年、全国の空き家数が900万戸を突破し、過去最多を更新した。住宅がこれだけ余る時代になっても年間着工戸数のうち未だ9割近くが新築であり、空き家が増え続けているという状況はやはり異常であると言わざるを得ない。また、大量供給され続ける住宅の建て方やそこで想定される暮らし方が既存の住宅と比べて持続可能であるかという点、そうは思えない。

●今回の特集では、空き家を含む、棄てられた住まいや場所に手を加える人たちの営みに焦点を当てた。ご登場いただいた方々の講演や論考を拝見し、「廃棄物」に対するまなざしとアプローチの方法は自分が想像していたよりもはるかに多彩であった。廃棄物とは、「資源」と「ごみ」のあいだで揺れ動く不安定な何かである。価値が定まっていないだけに、さまざまな可能性に開かれているということかもしれない。

●「ものを大事にする」、「長く使い続ける」と言

うことは容易だが、実行するのは簡単ではない。それに、それだけが廃棄物との向き合い方ではない。活用して新たな循環を生み出してもよいが、解体して区切りをつけてもよいし、そのまま朽ちていく姿をただ愛でるのもよいだろう。問題は、廃棄物と向き合わないという社会の態度であり、そのような価値観が固定化されることによる将来への影響ではないだろうか。

●そう遠くない未来、日本では人口減少がさらに進み、住宅はますます余るだろう。そのときまでに現在の価値観が更新されず、廃棄物と向き合う取り組みが拡がらなかつたとする。そのとき、私たちや将来生まれてくる世代にとって都市の風景はどのようなものになっているだろうか。本号特集の編集を終えて、少しばかりの不安を覚えながらも、人と廃棄物とがくつくる世界への想像がかき立てられる。

〔前田昌弘／本号責任編集〕

〔年2回刊〕

すまいるん

通巻115号

2024年8月25日発行

発行 一般財団法人住総研

発行人 山下英樹

〒103-0027 東京都中央区日本橋3丁目12番2号

朝日ビルヂング2階
TEL: 03-3275-3077・3078 FAX: 03-3275-3079

E-mail: info@jusooken.or.jp

URL: http://www.jusooken.or.jp

定価 本体1,000円＋税